日本文法教科書

上卷

教科書文庫
4
815
40-1914
2000044037

43389
教科書文庫
4
815
40-1914
20000
44037

資料室
中央図書館
3759
Ta14
教科書文庫
4
815
40-1914
2000044037
廣島大教
44637

廣嶋高等師範學校教諭 田中好賢
廣嶋高等師範學校教諭 髙本千鷹 共著

日本文法教科書

東京 合資會社 六盟館

ケ、リ、クル、クレ、コ
カ、キ、ク、ケ、ル、ル、コ。

シ、シ、セ、ル、ル、レ、レ、ヨ。
ラ、リ、ル、レ、ロ

広島大学図書
2000044037

緒言

賀

一、本書は主に中等程度の各學校に於ける文法教科用書として編纂せるものにして、分ちて上下二卷とし、各卷更に練習篇を添ふ。

一、本書の内容は專ら學習上の便宜によりて排列し、階段的に漸進せしむる方針をとれり。

一、文法の術語及び學説は、方今諸家の所論區々にして歸一せざるものあり。本書はなるべく普通に行はるる所に從ひ、敢て妄に新を逐ひ異を立てず。

一、本書の説明は煩冗を避けて簡明に就き、ゴシック活字又は朱字印刷等によりて、速に要項を會得せしめんことをつと

めたり。

一、本書の説明篇と練習篇とは二にして一といふべく、互に分離すべからざるものなれば、常に之を併用して、明確に文法上の智識を了悟せんことを望む。

大正三年五月

著者識

日本文法教科書　上卷

目次

第一篇　總論……二
第二篇　品詞論……一〇
第一章　名詞……一〇
第二章　代名詞……一一
第三章　動詞……一三
第四章　形容詞……二六
第五章　形容動詞……二八
第六章　動詞の假名遣……三〇
第七章　音便及び其の假名遣……三四

第八章　助動詞……三六
第九章　動詞と助動詞との連結……五三
第十章　誤り易き助動詞の連結……五六
第十一章　接續詞……六〇
第十二章　感動詞……六二
第十三章　副詞……六四

上卷　目次終

帝國圖書館藏

日本文法教科書　上卷

田中好賢
高木千鷹　共著

文法三綱領

一　文法は記憶の學科なり。

二　文法は練習の學科なり。

三　文法は應用の學科なり。

第一篇　總論

總論

國語

國語　各國民には各其の使用する言語あり、之を國語といふ。國語は國によりて異なり。日本語・支那語・英語・佛語・獨逸語等は、皆それぞれ其の國民特有の國語なり。

口語

文語

口語　文語　われ等が日常の談話に用ふる言葉（コトバ）を口語といふ。

例へば

(1)花が咲いて居ます。

(2)太郎が學校から歸ります。

等の如し。之に對して

(1)花咲けり。

(2)太郎學校より歸る。

文字

漢字

和字

假名

等の如きものを文語といふ。

文字　文字も亦、國によりて異なり。我が國にては一般に**漢字**と**假名**とを用ふ。

漢字　漢字はもと支那の文字なるが、上古我が國に傳はりてより、我が國人は日常之を用ひなれて、遂に我が國語を寫す文字となせるなり。されど後に至りて

榊　畑　辻　働　噺（ハナシ）

等の如く、新に我が國にて製作せるものもあり、之等を**和字**といふ。

假名　假名には**片假名**と**平假名**との兩體あり。片假名は漢字の畫（カク）を省略して成れるものの、平假名は漢字の草體より成れるものなり。

文法　語連文語

文法　口語にも文語にも、各**一定の法則**あり。口語の法則を**口語法**といひ、文語の法則を**文法**といふ。以下諸子の學習せんとするものは、主に文語の法則即ち文法なり。

語　連語　文

花。　咲く。

太郎。　學校。　より。　歸る。

等の如く、一つ一つの思想を現はせる言葉を**語**(word)といひ、語の集まれるもの

咲く花。

歸る太郎。

等を**連語**といひ、

花咲く。

十品詞

太郎學校より歸る。

等の如く、まとまりたる思想をあらはすものを**文**(sentence)といふ。

注意　連語は時に**句**といふことあり。されど本書にて**句**といふは、別の意義なれば、混ずべからず。

十品詞　語は之を十種類に分ち、稱して**十品詞**といふ。其の名稱左の如し。

一　名詞(noun).　英雄(例)

二　代名詞(pronoun).　我

三　動詞(Verb).　働く

四　形容詞(Adjective)　善し

五　形容動詞(not noun etc.)　美しかり

六　助動詞(　たり

七 接續詞(Conjunction)又

八 感動詞(Interjection)ああ

九 副詞(Adverb) 最も

〇 助詞(　　) の

文の二部

文の二部 文は左の如く二部に大別せらる。

主部 (說明せらるる部分) Subject.

述部 (說明する部分) Predicate.

例へば

主部	述部
(1) 花	咲く。
(2) 太郎	學校より歸る。
(3) 古今第一の英雄は	誰ぞ。

句讀點

五十音圖

句讀點 文中に用ひらるる諸種の標(シルシ)を句讀點(クトウテン)といふ。

、テン(讀點) 文中にて切るべき所に用ふ。

。マル(句點) 文の終りに用ふ。

・ポツ(並列點) 並列せられたる名詞の間に用ふ。

「」カギ 引用の場合に用ふ。

『』フタヘカギ 二重の引用の場合に用ふ。

◎()カッコ(括弧) 文中特に說明を要する場合に用ふ。

注意 右の中、最も使用し難きは、テンにして、其の用法に關する規定も複雜なるを以て、初めは讀本等について練習するを便なりとす。

五十音圖 國語の法則を學ぶにつきては、先づ五十音圖を縱横に練習し置くを要す。

五十音圖（片假名）（小字平假名）

行／列	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列
ア行	アあ	イい	ウう	エえ	オお
カ行	カか	キき	クく	ケけ	コこ
サ行	サさ	シし	スす	セせ	ソそ
タ行	タた	チち	ツつ	テて	トと
ナ行	ナな	ニに	ヌぬ	ネね	ノの
ハ行	ハは	ヒひ	フふ	ヘへ	ホほ
マ行	マま	ミみ	ムむ	メめ	モも
ヤ行	ヤや	イい	ユゆ	エえ	ヨよ
ラ行	ラら	リり	ルる	レれ	ロろ

いろは歌　小字變體平假名

いろは
にほへと
ちりぬる
をわか
よたれそ
つねなら
むうゐの
おくやま
けふこえ
てあさき
ゆめみし
ゑひもせ
す

五十音圖
いろは歌

濁音
半濁音

ワ行	ワわ
	ヰゐ
	ウう
	ヱゑ
	ヲを
ン	ん

	ん

注意 五十音圖中、縱のならびを**行**（ギヨウ）といひ、横のならびを**列**（レツ）といふ。此の中にて、ヤ行のイ・エはア行のイ・エと、ワ行のウはア行のウと區別せず、故に實は四十七音なり。

濁音　半濁音

濁音				半濁音
ガ行	ザ行	ダ行	バ行	パ行
ガが	ザざ	ダだ	バば	パぱ
ギぎ	ジじ	ヂぢ	ビび	ピぴ
グぐ	ズず	ヅづ	ブぶ	プぷ
ゲげ	ゼぜ	デで	ベべ	ペぺ
ゴご	ゾぞ	ドど	ボぼ	ポぽ

品詞論

第二篇　品詞論

第一章　名詞

名詞

定義　**事物の名稱**をあらはす語を名詞といふ。

種類　名詞は左の二種に分つ。

㊀ 固有名詞　或一事物に限るもの。

太郎。　富士山。　天龍川。　前九年の役。

㊁ 普通名詞　同種類中、何れの事物にも通用せらるるもの。

人。　山。　川。　戰爭。

數詞

一　二　三個　十町　百　千　等は數の名にして、固より名詞なり。されど之を特に**數詞**と稱することあり。

注意 **彼は東洋のナポレオンなり。**　のナポレオンは、固有名詞が普通名詞に用ひられたるものにして、**松林龜**

などが、人名となれる時は、其の反對なり。

第二章　代名詞

代名詞

定義　**事物の名の代り**に用ひらるる語を代名詞といふ。

種類　代名詞は左の如く分類す。

人代名詞（ジン）	自稱	われ、（わが）僕 私	對稱	君 汝	他稱
					不定稱
		かれ		誰 だれ	

		近稱	中稱	遠稱	不定稱
指示代名詞（シジ）	事物	これ	それ	あれ	どれ
	地位	ここ	そこ	あそこ　あすこ	どこ
	方向	こなた	そなた	かなた　あなた	いづかた　どなた

體言

參考　名詞・代名詞を總稱して體言といふ。

動詞

定義

第三章　動詞

定義　事物の動作・存在及び狀態等を言ひ表はす語を動詞といふ。

動詞の活用

動詞の活用

本を讀まず。　將然形

本を讀みたり。　連用形

本を讀む。　終止形

本を讀む人あり。　連體形

本を讀めども上達せず。　已然形

本を讀め。　命令形

六形名の意義は卷末參照

朱字にて示したる如く、凡て動詞は六種の形に變化するものなり。斯くの如く變化することを、動詞の活用といふ。而して其の六形の變化に對しては、各右に示すが如き名稱を附す。

語幹　語尾

語幹　語尾　動詞の變化せざる部分、即ち**よむ**の**よ**を語幹といひ、變化する部分　**ま・み・む・め**　を語尾といふ。

四段活用

動詞の活用には種類多し。以下順次之を述べん。

一　四段活用　今、**讀む**の語尾を五十音圖にあてはむれば、

マ行の　ま　み　む　め

の四段に活用することを知るべし。故に**讀む**を**四段活用の動詞**といふ。

注意　動詞の連用形は大抵**名詞**となる。**霞　氷　談　堀　帶**　等皆然り。但し人名はおほく終止形を用ふ。而して此のことは、固より四段活用以外の動詞にも適用せらる。

四段活用の動詞を表示すれば左の如し。

	動詞	將然	連用	終止	連體	已然	命令
カ行	行	か	き	く	く	け	け
サ行	寫	さ	し	す	す	せ	せ
タ行	待	た	ち	つ	つ	て	て
ハ行	歌	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
マ行	摘	ま	み	む	む	め	め
ラ行	賣	ら	り	る	る	れ	れ

△**注意** 四段活用の動詞は、カ行・サ行・タ行・ハ行・マ行・ラ行の六行に限るものなり。

されど之に屬する動詞の數は最も多く、我が國語に於ける動詞中の首位を占む。

ラ行變格活用

ラ行變格活用

有り(在り)。　居り。　侍(はべ)り。

此の三語の活用は、

動詞	將然	連用	終止	連體	已然	命令
1. 有(在)	ら	り	り	る	れ	れ
2. 居	ら	り	り	る	れ	れ
3. 侍	ら	り	り	る	れ	れ

右の活用は、ラ行の四段活用に似たれども、其の終止形が彼はるにして、此はりなるを以て、ラ行四段活用と別ち、之をラ行變格活用の動詞といふ。

注意 ラ行變格活用の動詞は、前にあげし三語のみ。而して其の口語は四段に活用す。

有　ら　り　る　れ　れ

ナ行變格活用

三 ナ行變格活用

往ぬ(去ぬ)。　死ぬ。

此の二語の活用は

動詞	將然	連用	終止	連體	已然	命令
往(去)	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
死						

なり。此の二語をナ行變格活用の動詞といふ。

注意 ナ變の動詞は、前にあげし二語のみ。而して口語にては、四段に活用すること、前のラ變の如し。

往　な　に　ぬ　ぬ　ね　ね

但し地方によりては、更に別種の活用を取ることあり。

上二段活用

四 上二段活用

猿は木より落ちず。　タ4

猿も木より落ちたり。

猿、木より落つ。

猿も木より落つること、あり。

猿は幾たびも木より落つれども、また上る。

木より落ちよ。

落つは右に示す如く、イ列とウ列とに活用し、ウ列に更にるとれとが付くなり。

イ列もウ列も共に五十音圖中の上部に位するを以て、之を上二段活用の動詞といふ。

上二段活用の動詞を表示すれば左の如し。

下二段活用

	動詞	將然	連用	終止	連體	已然	命令
カ行	生	き	き	く	くる	くれ	きよ
タ行	落	ち	ち	つ	つる	つれ	ちよ
ハ行	強シ	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひよ
マ行	恨	み	み	む	むる	むれ	みよ
ヤ行	老	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ
ラ行	懲	り	り	る	るる	るれ	りよ

注意 ヤ行上二段の動詞は **老ゆ　悔ゆ　報ゆ** の三語のみ。

五 下二段活用

五十音圖中の下部二段に活用するものを、**下二段活用の動詞**といふ。

	動詞	將然	連用	終止	連體	已然	命令
ア行	得	え	え	う	うる	うれ	えよ
カ行	受	け	け	く	くる	くれ	けよ
サ行	載	せ	せ	す	する	すれ	せよ
タ行	捨	て	て	つ	つる	つれ	てよ
ナ行	尋	ね	ね	ぬ	ぬる	ぬれ	ねよ
ハ行	教	へ	へ	ふ	ふる	ふれ	へよ
マ行	求	め	め	む	むる	むれ	めよ
ヤ行	榮	え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	えよ
ラ行	後ホク	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
ワ行	植	ゑ	ゑ	う	うる	うれ	ゑよ

注意 ア行下二段活用の動詞は **得** の一語にて、ワ行下

上一段活用

二段活用の動詞は　植う　飢う　据う　の三語のみ。

六 上一段活用

五十音圖中、上部の一段にのみ活用するものを**上一段活用**の動詞といふ。

上一段活用の動詞は左表にあげたる十三語のみ。

	動詞	將然	連用	終止	連體	已然	命令
ア行	射、鑄	い	い	いる	いる	いれ	いよ
カ行	著	き	き	きる	きる	きれ	きよ
ナ行	似、煮	に	に	にる	にる	にれ	によ
ハ行	乾	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
マ行	見、惟、鑑、試、顧	み	み	みる	みる	みれ	みよ
ワ行	居、率（ヒキヰ）	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ

下一段活用

注意 上二段活用の動詞は、口語にては上一段活用となるものなり。

生　き　き　きる　きる　きれ　きよ

七 下一段活用

蹴（ケ）る　の活用は

動詞	將然	連用	終止	連體	已然	命令
蹴	け	け	ける	ける	けれ	けよ

の如く、五十音圖中の下部一段の活用なれば、之を**下一段活用の動詞**といふ。下一段活用の動詞は右　**蹴る**　の一語のみ。

注意 下二段活用の動詞は、口語にては下一段活用となる。

受　け　け　ける　ける　けれ　けよ

カ行變格活用

八 カ行變格活用

來（クル）の活用は

動詞	將然	連用	終止	連體	已然	命令
來	こ	き	く	くる	くれ	こよ

なり。之を**カ行變格活用の動詞**といふ。

注意 カ行變格活用の動詞は**來**の一語のみ。**來る**はラ行四段なり。

サ行變格活用

九 サ行變格活用

爲（スル）の活用は

動詞	將然	連用	終止	連體	已然	命令
爲	せ	し	す	する	すれ	せよ

なり。之を**サ行變格活用の動詞**といふ。

サ行變格活用の動詞は**爲**の一語あるのみなれども、左の如く**漢語・名詞**及び稀に**外國語**を動詞とするときは、皆此の活用を**踏む**。（此の踏むといふ語は**取る**といふの意なり。）

著す　發す　屬す　祕す　錄す
論ず　命ず　禁ず　長ず　變ず
散歩す　運動す　勉强す　賞賛す　批評す
都す（ミヤコ）　旅す　物す　音す
リーディングす（ウォーク）

注意 サ行に活用する動詞三種あり。其の相違左の如し。

(1) サ行四段　推　さ　し　す　す　せ　せ
(2) サ行下二段　寄（ヨ）　せ　せ　す　する　すれ　せよ
(3) サ行變格　爲（スル）　せ　し　す　する　すれ　せよ

九種活用

九種活用　以上學びたるところを總括すれば、動詞の活用には左の**九種**あることを知る。之を動詞の九種活用といふ。

㊀ 四段活用
㊁ 上二段活用
㊂ 下二段活用
㊃ 上一段活用　射　鑄　著　似　煮　乾　見　惟　鑑　試　顧　居　率（十三語）
㊄ 下一段活用　蹴（一語）
㊅ カ行變格活用　來（一語）
㊆ サ行變格活用　爲（一語）
㊇ ナ行變格活用　往（去）　死（二語）
㊈ ラ行變格活用　有（在）　居　侍（三語）

（二十一語）

同一の動詞にして幾種にも活用するものあり。

立つ（タ四）　たち　つ　て
立つ（タ下二）　て　て　つ　つる　つれ　てよ
流る（ラ下二）　れ　れ　る　る　れ　れよ
流す（サ四）　さ　し　す　す　せ　せ

動詞の自他

動詞の自他　右の中、朱字の活用に屬するものを自動詞、黑字の活用に屬するものを他動詞といふ。

自動詞は獨り自らする動作にして、他動詞は他を處分する意を含む。自動・他動の別は、かかる同一動詞のみに限らず、相異なる動詞の間にも存することと勿論なり。

（が）ヲ取れ　自動詞　來る　吠ゆ　肥ゆ　往ぬ　咲く　慣る　似る
（を）ヲ取れ。　他動詞　分つ　叩く　讀む　煮る　綴る　打つ　問ふ

形容詞

定義

第四章　形容詞

定義　體言の上、又は下につきて、其の意義を**限定**する語を形容詞といふ。

山高くとも。　山高く聳ゆ。　山高し。　高き山。

山高ければ。

花美しくば。　花美しく咲く。　花美し。

美しき花。　花美しけれども。

形容詞の活用

形容詞の活用　形容詞の活用に二種あり。何れも將然・連用・終止・連體・已然の**五形**に變化し、命令形は之を缺く。

	將然	連用	終止	連體	已然
高	く	く	し	き	けれ
美し	く	く	●	き	けれ

下卷第十七章・第十八章參照

右表中の美し　又は**惡し**等の如く、其の語幹がしにて終れるものの終止形は、語幹のままなり。決して美しし・惡しし等といふべからず。要するに形容詞の終止形に　しし　と、「し」が二つ重なることなしと知れば足れり。

注意

(1) 形容詞が、名詞になるには、大抵其の語幹を用ふ。**赤白　黑　遠淺**　等皆然り。但し人名は多く終止形を用ふること動詞に同じ。**清厚**（キヨシ アツシ）**毅**（ゴヘシ）　等の如し。

又　みげさ　を添へて名詞となすことあり。**強み**

深み　重げ（オモ さ）　**嬉しさ**（ソレ げに）　**樂しさ**（げに）　等是なり。

(2) 形容詞は、口語にては唯一種の活用となる。

面白し　宜し　うい　いい　いけれ

形容動詞 定義

第五章　形容動詞

定義　一方には**形容詞**の役目をなし、一方には**ラ行變格動詞**に同じき活用をなす語を形容動詞といふ。

例へば

(1) 垣根に咲ける花甚だ**美しかり**き。

(2) 風なき星月夜いと**靜なり**。

(3) 滄海**漫々たり**。

右の三例中、美しかり・靜なり・漫々たりは、花・星月夜・海の狀態をいへるものにて、其の役目は全く形容詞に同じ。然るに其の活用は動詞ラ行變格に同じ。

	將然	連用	終止	連體	已然	命令
美しか	ら	り	り	る	れ	れ

種類　用言

◎形容動詞ト助動詞トヲ区別スルニハ副詞甚だスハ頗るヲ上ニ置キテ見ルヲ要ス

種類　形容動詞の語尾は**かり**　**なり**　**たり**　の三種あり。

かりにて終るものは、形容詞○○くと動詞ありとの結合。

なりにて終るものは、副詞○○にと動詞ありとの結合。

たりにて終るものは、副詞○○とと動詞ありとの結合。

にして、其の例左の如し。

靜	な	ら	り	り	る	れ	れ
漫々た	ら	り	り	る	れ	れ

(1) 美しく(か)あり。

(2) 靜に(な)あり。　(指定助動詞の　君子なりと誤るなかれ。)

(3) 漫々と(た)あり。　(指定助動詞の　大將たりと誤るなかれ。)

參考　動詞・形容詞・形容動詞を用言といふ。

第六章　動詞の假名遣

國語假名遣の中、動詞の假名遣は其の活用によりて知らる。

ハ行四段	思(わ)は	思(い、る)ひ	思(お、を)ふ	思(え、ゑ)へ		
ハ行上二段		強(い、る)ひ	強(ろ、ゆ)ふ			
ハ行下二段			換(ろ、ゆ)ふ	換(え、ゑ)へ		
ヤ行上二段		報(ひ、る)い	報(ふ、ろ)ゆ			
ヤ行下二段			越(ふ、ろ)ゆ	越(へ、ゑ)え		
ワ行下二段			植(ふ、ゆ)う	植(へ、え)ゑ		
ダ行上二段		閉(じ)ぢ	閉(ず)づ			
ダ行下二段			出(ず)づ			
ザ行下二段			交(ず)ず			

（表中の小字は誤れる假名遣なり）

參考

今、右の諸行に屬する動詞の主なるものを左にあげん。成るべく之を記憶すべし。

㊀ハ行四段活用動詞（は・ひ・ふ・への假名を用ふべきもの）

思ふ　舞ふ　洗ふ　問ふ　買ふ　叶ふ（等）

㊁ハ行上二段活用動詞（ひ・ふの假名を用ふべきもの）

強ふ　戀ふ　用ふ　生ふ　誣ふ（等）

㊂ハ行下二段活用動詞（ふ・への假名を用ふべきもの）

換ふ　教ふ　堪ふ　稱ふ　唱ふ

憂ふ　支ふ　抱ふ　構ふ　押ふ　叶ふ

備ふ　供ふ　答ふ　捕ふ　從ふ　與ふ

誂ふ　衰ふ　敷ふ　考ふ　加ふ　拵ふ

貯ふ　携ふ　譬ふ　仕ふ　傳ふ　存命ふ
控ふ　雑ふ　辨ふ　添ふ　（等）

四　ヤ行上二段活用（い・ゆの假名を用ふべきもの。）
老ゆ　悔ゆ　報ゆ（此の三語のみ）

五　ヤ行下二段活用（ゆ・えの假名を用ふべきもの。）
越ゆ　聞ゆ　冷ゆ　消ゆ　覺ゆ　吠ゆ
肥ゆ　殖ゆ　榮ゆ　見ゆ　燃ゆ　萠ゆ
生ゆ　凍ゆ　癒ゆ　煮ゆ　冴ゆ　聳ゆ
絶ゆ　潰ゆ　費ゆ　（等）

六　ワ行下二段活用（う・ゑの假名を用ふべきもの。）
植（栽）う　飢（餓・饑）う　据う（此の三語のみ）

七　ダ行上二段活用（ぢ・づの假名を用ふべきもの。）
閉づ　攀づ　恥（愧）づ　綴づ　怖づ　（等）

八　ダ行下二段活用（づ・での假名を用ふべきもの。）
出づ　撫づ　秀づ　詣づ　愛づ　奏づ　（等）

九　ザ行下二段活用（ず・ぜの假名を用ふべきもの。）
交ず（此の一語のみ）

▲注意　されど漢語を動詞としたるもの、即ちサ行變格活用の中、濁音となるもの論ず　信ず　等は皆ずを取る。

音便及び其の假名遣

音便の四種

第七章　音便及び其の假名遣

音便　發音の便によりて、或音が他の音に變ることあり、之を音便といふ。

音便には**四種**ありて、**い音便・う音便・ん音便・促音便**といふ。四種の中假名遣に關係あるものは、**い音便・う音便及びん音便**の三つなり。此の場合にはそれぞれ**いうん**の假名を用ふべし。

一　い音便　きがいトナル

(原音)	(音便)	(誤れる假名遣)
書きて	書いて	書ひて
指して	指いて	指ひて
悲しきかな	悲しいかな	悲しひかな

二　う音便

△言ひて　言うて　言ふて
△問ひて　問うて　問ふて
△高くして　高うして　高ふして
△久しくして　久しうして　久しふして

三　ん音便

死にて　死んで　死むで
遊びて　遊んで　遊むで
好みて　好んで　好むで

四　促音便

△勝ちて　勝つて
食ひて　食つて
取りて　取つて

第八章　助動詞

定義　**動詞を助けて、其の意義を完からしむる語を助動詞**といふ。

(1) 花咲かず。
(2) 花咲きたり。
(3) 我は花見に行くべし。

注意 助動詞の中、なり・たりは動詞のみならず、名詞・代名詞にもつき、如しは助詞にもつく。

(1) 正成は忠臣なり。
(2) 古今第一の英雄は我なり。
(3) 小早川隆景は征韓軍の先鋒たり。
(4) 豪宕奔放の致あること、かれの文の如きは少し。

種類　助動詞は種類多し。今之を分つて十三種とす。其の名稱左の如し。

一 時　(1)過去　(2)現在完了　(3)未來
二 推量
三 義務
四 能力
五 命令
六 受身
七 使役
八 尊敬
九 指定
〇 詠嘆
一 希望
二 比較
三 否定

助動詞の活用　助動詞の活用は**動詞に似たるもの**多けれども、又全く異なるものあり。左に之を表示す。（其の**命令形の有無**は特に注意すべし。）

種類		過去 き	過去 けり	現在 つ	現在 ぬ	完了 たり	完了 り	未 む	來 まし	推 らむ	推 らし	推 べし	推 む	推 まし	量 めり
活用	將然	×	ケラ	テ	ナ	タラ	ラ	×	×	×	×	ベク	×	×	×
	連用	×	ケリ	テ	ニ	タリ	リ	×	×	×	×	ベク	×	×	メリ
	終止	キ	ケリ	ツ	ヌ	タリ	リ	ム	マシ	ラム	ラシ	ベシ	ム	マシ	メリ
	連體	シ	ケル	ツル	ヌル	タル	ル	ム	マシ	ラム	ラシ	ベキ	ム	マシ	メル
	已然	シカ	ケレ	ツレ	ヌレ	タレ	レ	メ	マシカ	ラメ	ラシ	ベケレ	メ	マシカ	メレ
	命令	×	×	テヨ	ネ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

四の已然にサ變の將然に

種類		受身 る	受身 らる	使役 す	使役 さす	使役 しむ	尊敬 る	尊敬 らる	尊敬 す	尊敬 さす	尊敬 しむ	尊敬（語敬） せらる	尊敬（語敬） させらる	尊敬（語敬） しめらる
活用	將然	レ	ラレ	セ	サセ	シメ	レ	ラレ	セ	サセ	シメ	セラレ	サセラレ	シメラレ
	連用	レ	ラレ	セ	サセ	シメ	レ	ラレ	セ	サセ	シメ	セラレ	サセラレ	シメラレ
	終止	ル	ラル	ス	サス	シム	ル	ラル	ス	サス	シム	セラル	サセラル	シメラル
	連體	ル	ラル	スル	サスル	シムル	ルル	ラルル	スル	サスル	シムル	セラルル	サセラルル	シメラルル
	已然	ルレ	ラルレ	スレ	サスレ	シムレ	ルレ	ラルレ	スレ	サスレ	シムレ	セラルレ	サセラルレ	シメラルレ
	命令	レヨ	ラレヨ	セヨ	サセヨ	シメヨ	レヨ	ラレヨ	セヨ	サセヨ	シメヨ	セラレヨ	サセラレヨ	シメラレヨ
		四、ナ、ラ、に	その他に	四、ナ、ラ、に	その他に	全體に	古言	方言	古言	方言	古言	四、ナ、ラ、に	その他に	全體に
							き	ひ				極度の尊敬		

せ・させ・しめの下に「給ふ」を附することあり

	義務		義務	能力	能力	能力	命令	命令
	けん	べし	べし	らる	る	べか	べし	べか
動詞・助動詞の命令形	×	ベク	ベク	ラレ	レ	ベカラ	×	ベカラ
ナ（終止形に）	×	ベク	ベク	ラレ	レ	ベカリ	×	×
ナカレ（連體形に）	ケム	ベシ	ベシ	ラル	ル	×	ベシ	×
ナ……ソ（連用形をはさむ）	ケム	ベキ	ベキ	ラル	ル	ベカル	×	×
カ變・サ變は將然形）	ケメ	ベケレ	ベケレ	ラレ	ルレ	ベカレ	×	×
	×	×	×	×	×	×	×	×

注意 助動詞は時に用言の中に入れらるることあり。

	指定	詠嘆	希望	比較	否定	否定	否定
	なり	なり	たし	どとし	ず	じ	ざり
	ナラ	ナリ	タク	ゴトク	ズ	×	ザラ
	ナリ	ナリ	タク	ゴトク	ズ	×	ザリ
	ナリ	ナル	タシ	ゴトシ	ズ	ジ	×
	ナル	ナル	タキ	ゴトキ	ヌ	ジ	ザル
	ナレ	ナレ	タケレ	×	ネ	ジ	ザレ
	×	×	×	×	×	×	ザレ
	體言に用言の連體形に	體言に	用言の終止形に				

	否定	否定
	まじ	まし
	マジク	マホシク
	マジク	マホシク
	○	マホシ
	マジキ	マホシキ
	マジケレ	マホシケレ
	×	×

助動詞の種類　時

助動詞の種類

一　時（time）（現在のことをあらはすには助動詞を用ひず。）

㊀ 過去　（過去のことをあらはす場合。）

㊁ 現在完了　（今了れることをあらはす場合。）

㊂ 未來　（未來のことをあらはす場合。）

以上の㊀㊁㊂をあらはすには、それぞれ助動詞を用ふ。

㊀ 過去

動詞	助動詞	將然	連用	終止	連體	已然	命令
行き（連用）	き	×	×	き	し	しか	×
歸り（連用）ラ變	けり	けら	けり	けり	ける	けれ	×

㊁ 現在完了

動詞	助動詞	將然	連用	終止	連體	已然	命令
下二段 下り（連用）	つ	て	て	つ	つる	つれ	てよ
ナ變 語り（ナ變以外ノ連用）	ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
ラ變 咲き（連用）	たり	たら	たり	たり	たる	たれ	×
ラ變 勉強せ（サ變ノ將然）買へ（四段ノ已然）	り	ら	り	り	る	れ	×

過去及び完了の場合は、口語にては皆たにてあらはし、別に區別を立てず。

(1) 昨日公園に行きき。（……行ッタ）

(2) 去年東京に遊びけり。（……遊ンダ）

(3) 今汽車より下りつ。（……下リタ）

(4) 父は次の話を語りぬ。（……語ッタ）

(5) 庭の櫻美しく咲きたり。（……咲イタ）

(6) 高價の笛を買へり。（……買ッタ）

注意 現在完了のたり・りは前述の意義の外に、又、、シテ居ル、、シテアルなど譯すべき場合あり。

(1) 木栽ゑられたり。（木ガ栽エラレテアル）（存在）

(2) 今彼は書を讀めり。（本ヲ讀ンデ居ル）（進行）又（存在）

(3) 書を讀める人あり。（本ヲ讀ンデ居ル人）（存在）又（進行）

(4) 花咲きたる木あり。（咲イテ居ル木）（存在）

㊂ 未來

動詞	助動詞	將然	連用	終止	連體	已然	命令
行か（將然）	む	×	×	む	む	め	×
讀ま（將然）	まし	×	×	まし	まし	ましか	×

此の「む」は「ん」と發音するを以てんとも書く。

(1) いざとく行かむ。（ん）

(2) 大君のへに死なむ。（ん）

(3) 喜んで聞かむ。（ん）

此のむは口語にてはう又はようとなる。

遊ばん（遊バウ）

行かん（行カウ）

讀まん（讀マウ）

眺めん（眺メヨウ）

載せん（載セヨウ）

續けん（續ケヨウ）

注意 時の助動詞は幾つも重ね用ひらるることあり。

(1) 三年程經たりし後、かの男來りて牛に乘せし賃を下さるべしといふ。

(2) 吉野の花を見て來んとて、彼處に出でたちにけり。

(3) 君が歸りなん日を指折り數へて待つべし。

此の場合には、上のたり・に・なは時を示さずして、其の事の確かさを表はすものなり。故に之を英語の過去完了・未來完了などと同一視すべからず。

推量

〔時助詞計違ノ〕

三 推量

動詞	助動詞	將然	連用	終止	連體	已然	命令
行く（終止）有る（ラ變ハ連體）	らむ	×	×	らむ	らむ	らめ	×
咲く（終止）（ラ變ハ連體）	らし	×	×	らし	らし	らし	×
聞く（終止）（ラ變ハ連體）	べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	×
讀ま（將然）	む	×	×	む	む	め	×
見（將然）	まし	×	×	まし	まし	ましか	×

(一)推量 (二)義務 (三)能力 (四)命令 べし

義務

三 義務

動詞	助動詞	將然	連用	終止	連體	已然	命令
流る（終止）（ラ變ハ連體）	めり	×	めり	めり	める	めれ	×
訪ひ（連用）	けむ	×	×	けむ	けむ	けめ	×

能力

四 能力

動詞	助動詞	將然	連用	終止	連體	已然	命令
行く（終止）有る（ラ變ハ連體）	べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	×
讀む（ラ變ハ連體）	べかり	べから	べかり	×	べかる	べかれ	×
書く（終止）居る（ラ變ハ連體）	べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	×
望む（終止）（ラ變ハ連體）	べかり	べから	べかり	×	べかる	べかれ	×
行か（四、ナ、ラ變ノ將然）	る	れ	れ	る	るる	るれ	×
載せ（四、ナ、ラ變以外ノ將然）	らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ	×

五 命令

動詞	助動詞	將然	連用	終止	連體	已然	命令
行く（終止） 居る（ラ變ハ連體） 捨つ（終止） 有る（ラ變ハ連體）	べし	×	×	べし	×	×	×
べから	べから	べから	×	×	×	×	×

注意

(1) べからはずに續きて**禁止**の意を示す。

(2) 命令には、右の外、動詞・助動詞の**命令形**を用ひ、又**禁止**を示すには、

な（終止形、ラ變は連體形につづく）

なかれ（連體形につづく）

な……そ（なそ の間は連用形、カ變・サ變は將然形）

を用ふ。其の例左の如し。

主人客を召さ
敎師生徒に課
せを受けさす
勅朝義經をして
平氏を討たしむ

受身

使役

六 受身

動詞	助動詞	將然	連用	終止	連體	已然	命令
打た（四、ナ、ラ變ノ將然）	る	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
載せ（四、ナ、ラ變以外ノ將然）	らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ

(イ) 受くな。

(ロ) 受くるなかれ。

(ハ) な受けそ。　な來そ。　な放任せそ。

七 使役

動詞	助動詞	將然	連用	終止	連體	已然	命令
召さ（四、ナ、ラ變ノ將然）	す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
捨て（四、ナ、ラ變以外ノ將然）	さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
討た（スベテノ將然）	しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ

尊敬

讀まるべし。
出発せらるべし。

高等先生質問

八 尊敬

動詞	助動詞	將然	連用	終止	連體	已然	命令
讀ま（四、ナ、ラ變ノ將然）	る	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
出發せ（四ナラ變以外ノ將然）	らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ
行か（四、ナ、ラ變ノ將然）	す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
答へ（四、ナ、ラ變以外ノ將然）	さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
栽ゑ（スベテノ將然）	しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ

注意 **給ふ**は四段活用の動詞なるが、單に尊敬の意をあらはすために用ひられたるときは、助動詞として取扱ふべし。書簡文に多く用ふる**奉る・候**等も亦同じ。

(1) はやとくとくと急ぎ給ふ。

(2) 御機嫌よく御暮しの事と存じ奉り候

指定　詠嘆

右の表の助動詞中、す・さす・しむを單獨に、尊敬の意に用ふるは、古き言ひ方にして、今は（讀ま）せらる・させらる・しめらる・又は（出発さ）せ給ふ・させ給ふ・しめ給ふを用ふ。而して是極度の尊敬なり。

九 指定

動詞	助動詞	將然	連用	終止	連體	已然	命令
聖人（體言ノミ）	たり	たら	たり	たり	たる	たれ	
受くる王者（連體體言）	なり	なら	なり	なり	なる	なれ	×

一〇 詠嘆

動詞	助動詞	將然	連用	終止	連體	已然	命令
ほむ（終止）	なり	×	×	なり	なる	なれ	×
行き（連用又主ニなりノ下）	けり	×	×	けり	ける	けれ	×

注意 指定の **なり** は**連體形**につづき、詠嘆の **なり** は**終止形**につづく。**けり** は過去も詠嘆も共に**連用形**につづけども、其の**文脈**によりて推知するを得べし。又主になりけり（詠嘆）とつづけ用ひらる。

希望

二 希望

動詞	助動詞	將然	連用	終止	連體	已然	命令
有り（連用）	たし	たく	たく	たし	たき	たけれ	×
聞か（將然）	まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ	×

比較

三 比較

動詞	助動詞	將然	連用	終止	連體	已然	命令
報ゆる（連體）（或ハの・がノ下）	ごとし	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	×	×

否定

助動詞活用約言

三 否定

動詞	助動詞	將然	連用	終止	連體	已然	命令
行か（將然）	ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	×
爭は（將然）	じ	×	×	じ	じ	じ	×
思は（將然）	ざり	ざら	ざり	×	ざる	ざれ	×
言ふ（終止）有る（ラ變ハ連體）	まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	×

助動詞活用約言　助動詞の活用は左の如くに分類せらる。

其の命令形あるものは、

ツ　ヌ　ス　サス　シム

ル（受身）（尊敬）　**ラル**（受身）（尊敬）

タリ（指定）　**ザリ**

の九語のみ。

こそ、ば、どし、も、然、形を造る場合。

活用形	助動詞
(1) 下二段の如きもの	ツ ル ラル ス サス シム
(2) ラ變の如きもの	ケリ(時) タリ リ ベカリ(義務能力) ナリ(指定) タリ
(3) ナ變の如きもの	ヌ
(4) 形容詞の如きもの	ベシ(推量義務能力) タシ マホシ ゴトシ マジ キ ム マシ ラシ メリ ラム
(5) 特別の活用をなすもの	ケム ベシ(命令) ベカリ(命令) ナリ(詠嘆) ケリ(詠嘆) ズ ジ

注意 右の中、同形の助動詞は **タリ ナリ ケリ** の三種なるが、何れも其の活用若しくは連結を異にせり。

之等は殊に注意して記憶すべし。

種類	活用						連結
タリ	時	ラ	リ	リ	ル	レ	×	連用形
タリ	指定	ラ	リ	リ	ル	レ	レ	體言
ナリ	指定	ラ	リ	リ	ル	レ	×	連體形 連體言
ナリ	詠嘆	×	×	リ	ル	レ	×	終止形
ケリ	時	ラ	リ	リ	ル	レ	×	連用形
ケリ	詠嘆	×	×	リ	ル	レ	×	連用形

第九章 動詞と助動詞との連結

動詞と助動詞との連結は、前に助動詞の各項につきてあげたり。今左に之を類別して表示すべし。

	將然形	助動詞	連用形	助動詞	終止形	助動詞	連體形	助動詞	已然形	助動詞
四段	書カ	ズ ザリ ン マシ ジ	書キ	ツ ヌ（変ニ教テハ終止形セ） タリ ケリ	書ク	ラン（有リ ベカリ ベシ ラシ）	書ク	ベラシン、ベカリ、ラジ、マシ、メリ、ナリ（指定）（有ルハ寺ニ接ス）	書ケ	り
ナ變	往ナ	ズ ザリ ン マシ ジ	往ニ（ハツヅ ナ變ニカズ）		往ヌ		往ヌル		往ヌレ	接續
ラ變	有ラ	スル シム ホシ	有リ		有リ		有ル		有レ	
上二	起キ	ズ ザリ ン マシ ジ	起キ	ケン	起ク	ベシ	起クル		起クル	
下二	教ヘ	ラル サス シム ホシ	教ヘ		教フ	ベカリ	教フル		教フレ	
上一	見	ズ ザリ ン マシ ジ	見	キ（シ、シカ）	見ル	ラシ	見ル		見レ	
下一	蹴	ラル サス シム ホシ	蹴	タシ	蹴ル		蹴ル		蹴レ	

○都出ひて天に逢はんとこしがこ甲斐もなく別れぬるかな（木之母之）

カ變	來コ	ズ ザリ ン マシ ジ シ、シカ ラル サス シム ホシ	來キ	ツ ヌ タリ ケリ ケン シ、シカ タシ	來ク	マジ ナリ（詠嘆）	來クル	ゴトシ	來クレ	セ
サ變	爲セ	ズ ザリ ン マシ ジ シ、シカ リ ラル サス シム ホシ	爲シ	ツ ヌ タリ ケリ ケン キ タシ	爲ス	メリ	爲スル		爲スレ	ズ

第十章　誤り易き助動詞の連結

る　らる

る　は動詞　四段・ナ變・ラ變の**將然形**に、

らる　は動詞　四段・ナ變・ラ變以外の**將然形**に連結す。

四段　ナ變　行か　死な　れ　れる　るる　るれ　れよ

ラ變　上二段　有ら　居ら　在ら　起き　下二段　受け　上一段　著キ　下一段　蹴ケ　カ變　來コ　サ變　爲セ　られ　られる　らるる　らるれ　られよ

す　さす　しむ

す　は動詞　四段・ナ變・ラ變の**將然形**に、

さす　は動詞　四段・ナ變・ラ變以外の**將然形**に、

しむ　はすべての動詞の**將然形**に連結す。（但し四ナ・ラ変ニハ連續セズ）

四段　ナ變　ラ變　行か　死な　有ら　せ　せる　する　すれ　せよ

上二段　下二段　起き　受け　しめ　しめる　しむる　しむれ　しめよ

上一段　下一段　著キ　蹴ケ　させ　させる　さする　さすれ　させよ

カ變　來コ　サ變　爲セ　運動　せさす　書にボートを買へり。

三 き

きは動詞・助動詞の**連用形**に連結す。

但しカ變・サ變に連るには特殊の連結法あり。即ち左の如し。

	將然	活用	連用	活用
	き	ノ	き	ノ
カ變	來コ	しか	來キ	しし
	[き]	しか	[き]	しか
サ變	爲セ	しか	爲シ	き
	[き]	しか	[し]	[しか]

□を附したるは連結せざるもの。

四 り

△りは四段の**已然形**と、サ變の**將然形**とにのみ連結し、その他の動詞には連結せず。

注意 此のりを上・下二段又は上・下一段等に連ねて

受けり　載せり　衰へり　起けり

見れり　蹴れり

等と用ふべからず。

五 べし　べかり　まじ　らし(2)　らん(1)

之等は皆動詞・助動詞の**終止形**に連る。

但しラ變及びラ變の如く活用する助動詞には其の**連體形**に連る。

注意 されば之等を、上・下二段等の動詞の**將然形・連體形**等に連ねて、受くれり

起くるべし。揚げべし。捨つるべし。受けまじ。

受くるべかりしを。信ずるらし。用ふるらん。

等といふは皆誤なり。

接續詞

定義

第十一章　接續詞

定義　語・連語又は文を**接續**する語を**接續詞**といふ。

一　語と語とを接續せる例。

(1) 行けども行けども水又水。

(2) 地理・歴史及び數學を學ぶ。

(3) 松島・嚴島並に天の橋立を日本三景といふ。

二　連語又は文を接續せる例

(1) 箱根峠を踰え、且富士山に登る。（彼、りたりを附すしバ完全ナ文ト成ル。）

(2) 水蒸氣の利用は頗る廣し、されど電氣の利用は更に大なり。

主なる接續詞

主なる接續詞　主なる接續詞は左の如し。

又　亦（復副詞に使ふ）　及び　或は　且　故に

ずなはち　而して　就いて　隨つて

因つて　かくて　然るに　然れども

されど　されば　加之　尤も

若しくは　旁（カタガタ）　並に　抑

將（ハタ）　但し　併し　乍併

注意　接續詞は**他の品詞**より成れること多し。右の中にても、本來の接續詞と稱すべきは、

又　且　ずなはち　尤も　將　但し

の數語に過ぎず、其の外は皆他の品詞より成れるものにして　及び　が動詞より來れることは、直ちに氣附く所なるべきが、**隨つて　然れども　加之**　等に至つては、頗る複雜なる組立を有す。

感動詞
定義

第十二章　感動詞

定義　凡て**感動**をあらはす語を感動詞といふ。

感動詞は單にそれ一語にて、一の感情をあらはせるものにして、文の他の部分と關係を有せざるを常とす。

例へば、

(1) 嗚呼、忠臣楠子之墓。

(2) あはれ、無雙の壯觀。

此の類のものには、

あら　あな　いで　いざ　やよ

等あり。

注意　右の外、助詞にも**感動**をあらはすものあり。之等は文中に於ける他の語に附屬して、始めて其の意味をあらはし、感動詞の如く**獨立**して用ひらるるものにあらず。

されど、便宜上之を**感動詞**の中に入る。

例へば、

(1) や　打てや鼓の春の曲。

(2) よ　天文二十三年秋のはじめの頃かとよ。

(3) かな　ああ、盛なるかな。

(4) かも　三笠の山に出でし月かも。

(5) はや　かくるる迄もかへり見しはや。

(6) かし　訪へかし人の花の盛りを。

此の類のものには、

(7) も。　(8) か。　(9) な。　(10) は。　(11) がな。　(12) かも。

や、

等あり。

副詞

定義

第十三章　副詞

定義　動詞・形容詞及び他の副詞並に文に副ひて、其の**意味を修飾する**語を副詞といふ。

例へば、

(1) 汽車速に走る。

(2) 山甚だ高し。

(3) 明日行かん。

(4) 汽車甚だ早く走る。

(5) 蓋しそは楯の一面を見たる議論なり。

右の例に於て、**甚だ・速に・蓋し**は皆本來の副詞にして、**明日・早く**は名詞・形容詞が副詞に轉用せられたるものなり。斯くの如く、名詞・形容詞等が副詞に轉用せらるること

下卷第十七章參照

本來の副詞

は極めて多し。

本來の副詞　本來の副詞の主なるものは左の如し。

いと　最も　只管　專ら

頗る　甚だ　しばし　自ら

しばらく　なほ　蓋し　聊か　然(シカ)

亦　復　又　は接續詞)　明に

恰も　嘗て　屢　斯く　若し

必ず　必ずしも　既に　殆ど

副詞の用法

注意　副詞が他の語、又は文の意味を修飾することを、副詞が之にかかるといふ。

副詞の用法

一　副詞は二つ以上重ね用ひらるる事あり。

此の場合に二つあり。

㊀重用せられたる諸副詞が、共に一つの語にかかる場合。

例へば

(1)暫く靜に待ち給へ。

(2)初めによく聞きただして行へ。

㊁重用せられたる諸副詞の中、上なるは下なる副詞のみにかかる場合。

例へば

(1)大いに明に見ゆ。

(2)甚だ早く走る。

■副詞は又語句を隔ててかかることあり。

例へば

(1)太郎は頻りに次郎を呼びたり。

(2)いかに氣力は盛なりとも、身體强健ならざるときはせん方なからん。

(3)暫く風の靜まるを御待あるべし。

注意　右の例の示す如く、副詞は常に其のかかる語の**すぐ上**にあるものと限るべからず。されば副詞の位置に注意することは、文を釋く上にも、又之を書く上にも、甚だ肝要なることとなり。又左の例などに於ては、

余は最も、甘き菓子を好む。

余は最も甘き菓子を好む。

テン即ち讀點の有無によりて、**最もの**かかる語を異にす。之等も注意すべし。

六形名の意義

參考　動詞の六形の名の意義を説明すれば左の如し。

將然形事の將に起らんとすることを言ふ形。

連用形用言に連ることを得べき形。

終止形意味完結終了の形。

連體形體言に連ることを得べき形。

已然形事の已(スデ)に定まれることを言ふ形。

命令形命令に用ふる形

注意　但し右は其の主なる用法につきて名づけたるものにして、實際の用法は更に此の名よりも廣しと知るべし。

日本文法教科書　上卷終

緒言

一、本書は主に中等程度の各學校に於ける文法教科用書として編纂せるものにして、分ちて上下二卷とし、各卷更に練習篇を添ふ。

一、本書の内容は專ら學習上の便宜によりて排列し、階段的に漸進せしむる方針をとれり。

一、文法の術語及び學説は、方今諸家の所論區々にして歸一せざるものあり。本書はなるべく普通に行はるる所に從ひ、敢て妄に新を逐ひ異を立てず。

一、本書の説明は煩冗を避けて簡明に就き、ゴシック活字又は朱字印刷等によりて、速に要項を會得せしめんことをつと

めたり。

一、本書の説明篇と練習篇とは二にして一といふべく、互に分離すべからざるものなれば、常に之を併用して、明確に文法上の智識を了悟せんことを望む。

大正三年五月

著者識

日本文法教科書　下卷

目次

第十四章　助詞……二
第十五章　誤り易き助詞の連結……一八
第十六章　係結及び呼應……二〇
第十七章　品詞の轉成……二四
第十八章　語の構造……二六
第三篇　文章論……三〇
第一章　文の成分（其の一）……三〇
第二章　文の成分（其の二）……三二
第三章　文の成分（其の三）……三四

第四章　成分の省略及び位置……三六
第五章　文の構造上の種類（其の一）……三八
第六章　文の構造上の種類（其の二）……四〇
第七章　複雜なる文……四二
第八章　文の性質上の種類……四四
第九章　文の解剖（其の一）……四六
第十章　文の解剖（其の二）……四八
附錄
一　送假名法……一
二　句讀法……一三
三　許容文法……二一

下卷　目次終

日本文法教科書　下卷

田中好賢
高本千鷹　共著

文法三綱領

一　文法は記憶の學科なり。
二　文法は練習の學科なり。
三　文法は應用の學科なり。

第十四章　助詞

定義　體言・用言（動形形容動詞）及び種々の語に添ひて、其の**關係**を表はす語を**助詞**といふ。

種類　助詞を分ちて左の**三種**とす。

一　體言にのみ添ふ助詞。

の(が)　つ　と　を　に　へ

より(から)　まで

二　用言にのみ添ふ助詞。

ば　ど(ども)　とも(と)　に　を

が　つつ　て　で

三　種々の語に添ふ助詞。

は(ば)　も　ぞ(し)　なむ　こそ

のみ　ばかり　ながら　して　として

にて　にして　とて

やか　だに　すら　さへ　な　な……そ

以下、順次之等三種の助詞につきて詳說すべし。

二　**體言にのみ添ふ助詞。**（體言にのみ添ふ助詞）

一　の(が)　之に二種あり。

(イ)、共に體言につきて、其の體言を**主語**たらしむるもの。

花の咲ける朝。

父がいふやう。

注意　口語にては此の場合には、すべてがを用ふ。

花が咲いてをる朝。

汽車が來る時。

(ロ)、共に體言と體言との**關係**を示すもの。

兄の本　君が代

人の噂　鬼が島

汝の家　東京の人

附つ　古くは　**つ**　を用ひて、此の(ロ)と同じ意味を現はせることあり。

國つ神　沖つ風

外つ國　種つ物

(二)と　之に二種あり。

(イ)、多くの事物を**並列**する意を示すもの。

(1) 一と二と三と四との和は十なり。

(2) 富めると貧しきとを問はず、齊しく學に就くべし。

(3) 清む(ス)と濁るとは大違ひ。

注意 此の　**と**　は並列せる事物の一つ一つに添ふべし。然らざれば文意の明ならざることあり。

(1) 我が軍は、敵軍と其の援兵の大半を捕へぬ。

(2) 余は昨日、西田君と春山君(と)を訪へり。

等の如き文につきて考へ見よ。

(ロ)、**指定**の意を示すもの。

(1) 十月三十一日を天長節祝日と定む。

(2) 月日のみ流るる水と早ければ。

(三)を　動作の**客**たるべき語につくもの。

(1) 飛行機には自記的微動計を備へ附くべし。

(2) 世界の人類は皆、日本人の忠勇を賞贊せり。

注意 此のをは　魚釣る次郎
本讀む太郎

等の如く省略せらるることもあり。

四 に　動作の向ふ**場所**を示すもの。
(1) 志を立てて、東京に赴く。
(2) 友に記念品を贈る。

五 へ　動作の**方向**を示すもの。
(1) 敵兵東へ走る。
(2) 前へ進む。

六 より(から)　動作の**移り行き**を示すもの。
(1) 某艦英國より歸航す。
(2) 去年より今年まで。

(3) 明日から始めむ。
(4) 身から出た錆。

注意 **より**には又**比較**を示すものあり。
(1) 義は泰山より重し。
(2) 百行は孝より大なるはなし。

七 まで　動作の**終止點**を示すもの。
(1) モスクバまで行く。
(2) 一から十まで。
(3) 御返事は私まで御送り下され度候。

用言にのみ添ふ助詞

一 用言にのみ添ふ助詞。

一 ば　用言の將然形に添ひて、**假定の條件**をあらはし、已然形に添ひて、**確定の條件**をあらはすもの。其の意は**順接**

なり。

(1) 風吹かば花散らん。（吹イタナラ）（假定の條件）

(2) 天氣よくば來給へ。（ヨカツタラ）（同　　）

(3) 風吹けば寒し。（吹クカラ）（確定の條件）

(4) 天氣よければ散歩す。（ヨイカラ）（同　　）

㈡ ど（ども）　用言の已然形に添ひて、**確定の條件**をあらはすもの。其の意は**逆接**なり。

(1) 問へど（ども）答へず。（問フケレドモ）

(2) 見れど（ども）見えず、聞けど（ども）聞えず。（見ルケレドモ　聞クケレドモ）

㈢ とも　動詞・形容動詞及び動詞的助動詞の終止形、形容詞及び形容詞的助動詞の將然形に添ひて、**假定の條件**をあらはすもの。（**逆接**なること前に同じ。）

(1) 斃るともやまじ。（斃レテモ）

(2) 褒めらるとも高ぶらず。（褒メラレテモ）

(3) 風烈しくとも行かん。（烈シクテモ）

(4) 彼の振舞は喜ぶべくとも、學ぶに足らず。（喜ブニ足ツテモ）

附と　古き言ひ方には　**と**　を用ひて　**とも**　と同意義をあらはせることあり。

山高くと貴からじ。

㈣ に　を　が　此の三つの助詞は皆、用言の連體形に添ひて、**確定の條件**をあらはす。**逆接**なること前に同じ。

(1) 花は咲けるに、鳥は來鳴かず。（咲イテヲルケレドモ）

(2) 今日來んとは、思はざりしを。（思ハナカツタノニ）

(3) 屢行きたるが、遂に得會はざりき。（行ツタケレドモ）

附も　屢行きたるも、遂に得會はざりき。

右の如く、もを用ふることは未だ一般に認められず。

㊄ つつ　動詞・助動詞の連用形に添ひて、事の**同時に起ること**をあらはすもの。

(1) 走りつつ射る。　(2) 走らせつつ射る。

◎㊅ て　動詞・助動詞・形容詞の連用形に添ひて、**接續の用**をなすもの。

(1) 歐洲を巡遊して、直ちに米國に向へり。

(2) 鄕人に請はれて、耕地を整理せり。

(3) 器物皆新しくて、快し。

㊆ で　動詞・形容動詞・助動詞の將然形に添ひて、**否定**の意をあらはすもの。但し古き言ひ方なり。

種々の語に添ふ助詞

取らで歸らん。

三 種々の語に添ふ助詞。

㊀ は(ば)　も　は　は事物を**差別**して提示する意をあらはし、も　は同じやうなる事物を**並列**する意をあらはす。

(1) 神は天地の主宰にして、人は萬物の靈なり。

(2) 昨日も、今日も、大雪降れり。

此の　は　を音便にて、ば　と濁ることあり。

(1) 優れるをば取らむ。

(2) 行かずばあるべからず。

㊁ ぞ　なむ(なん)　こそ　**特に指示せらるべき**語につくもの。

(1) 今日ぞ出立つ。(特に今日を指示す)

(2) 柿本人麿なむ歌の聖なりける。（特に人麿を指示す）
(3) 櫻こそ我が國の國花なれ。（特に櫻を指示す）

附し　ぞに似て、古き言ひ方なり。

(4) 京をし偲ぶ。
(5) 今し朝日の立昇る。

㊂ のみ　ばかり　限定の意をあらはすもの。

(1) 鳥の聲聞ゆるのみ。
(2) 君ばかり行け。

ばかりには又**程**の意を示すものあり。

旅行ばかり樂しきはなし。

㊃ ながら　ソノママ　ソレトトモニ　ツツ　ナレドモ

等の意をあらはすもの。

昔ながらの山櫻。　枝ながら食ふ。
讀みながら書く。　さりながら。

㊄ にて　にして　として　して　として

之等はもと、用言に添ふてと、助詞にと、又は動詞爲の連用形しとを重用せる語なり。

(イ、にて　（口語、デの意）
(1) 停車場にて知人に遭へり。
(2) 鉛筆にて記入す。

(ロ、にして　（口語、デアッテの意）

倫敦は世界第一の大都會にして、人口約七百萬ありとぞ。

(ハ、とて　（口語、トイッテ又はト思ッテの意）

(1) 散歩にとて出で行く。
(2) 誰とて知る人もなし。
(3) 軍人たらんとて、幼年學校に入る。

(ニ)、して　(口語、アッテの意)

(1) 幼くして父母を喪ふ。
(2) 路遠くして、日は暮れんとす。

注意 **して**は又

(1) 義經をして平氏を討たしむ。
(2) 清正をして先鋒たらしむ。

等の如く、助動詞　しむ　と相應じて使役の意をあらはすことあり。

(ホ)、として　(助詞とトしてトノ結合、種々ノ意ヲ有ス)

(1) 一人として知るものなし。
(2) 個人としては、誠によき人なり。

◎ **六**　**や　か**　**疑問**の意をあらはすもの。

(1) ありや、なしや。
(2) あるか、なきか。
(3) これは鶴なりや。
(4) 君は何歳なるか。

此の　**や　か**　は文の中間に置くことあり。

(1) いづこにか、今宵は宿を借らん。
(2) 花や速き、春や遲き。

又**反語**となることあり。

(1) 豈圖らんや、波上再生の縁あらんとは。

(2) 何をか憂へん。

(3) 思ひきや、雪ふみわけて君を見んとは。

七 だに　口語、デモ・サヘの意をあらはすもの。

(1) 糟糠にだに飽かず。

(2) 心だにまことの道にかなひなば、祈らずとても神や守らん。

八 すら　口語、デサヘモの意をあらはすもの。

小兒すら然り、況んや大人をや。

九 さへ　口語、マデモの意をあらはすもの。

雨烈しくて行き難きに、風さへ加はれり。

注意 だに　すら　さへ　の文語と口語とを比較すれば、左表に示すが如し。

文語	口語
だに	デモ・サヘ
すら	デサヘモ
さへ	マデモ

◎文語の　だに　すら　を用ふべき所に、さへ　を用ふるは、大いなる誤なり。

禁止の意をあらはすもの。

な　な……そ

泣くな。　泣きそ。

笑ふな。　笑ひそ。

注意 **な……そ** の間には動詞の**連用形**を挿むを常とすれども、カ變・サ變に限り、其の**將然形**を挿む。

な來そ。　な爲そ。

第十五章　誤り易き助詞の連結

一　や　か

一　や　は用言の**終止形**に、か　は其の**連體形**につづき、**疑問**を示す。

(1) 君は弟に算術を教ふや。

(2) 此の方法は悪しきか。

(3) 昨日競馬を見たるか。

二　上に疑問の語あるときは、**や**を用ひずして、**か**を用ふ。

(1) 幾許なるか。

(2) 誰に與へんか。

(3) 何人來るか。

(4) いかにすべきか。

二　とも　ど　ども

一　とも　は動詞・助動詞・形容動詞の**終止形**、形容詞及び形容詞的助動詞の**將然形**につづき、**逆接**を示す。

(1) 千年を經とも、亡失することなからん。(假定)

(2) 命は助りたりとも、不具となりてはいかにすべき。(同)

(3) 品質善くとも、價格のあまり不廉なるはよからじ。(同)

(4) 飲みたくとも、飲むな。(同)

二　ど　ども　は用言(動詞・形容詞・形容動詞)の**已然形**につづき、**逆接**を示す。

(1) 汲めど盡きず。(確定)

(2) 短けれども用をなすに足る。(同)

(3) 四聖は歿したれども、其の精神は千古に磅礴たり。(同)

(4) 波は穏なれども、霧深くして舟行危險なり。(同)

孔子　釋迦　キリスト　マホメット

三　ば　用言の**將然形**及び**已然形**につづき、**順接**を示す。

(1) 年老いば、心よわらん。(假定)

(2) 年若ければ、意氣昂れり。(確定)

係結及び呼應

係結

第十六章　係結及び呼應

一　係結

㊀ぞ　なん　や　かの係結。　文中、助詞ぞ・なん・や・かのあるときは、其の述語は連體形を用ふ。此の場合に於てぞ・なん・や・かの等を指して係といひ、文末の語を結といふ。

(1) これぞ日本一の霊山なる。

(2) 年頃結びつる友垣なんいとわすれ難き。

(3) これを誠の仁義とやいふべき。

(4) 何とかしたる。

㊁こそのの係結　文中、助詞こそのあるときは、其の述語は已然形を用ふ。こそを係といひ、文末の語を結といふこと前に同じ。

(1) 昨日こそ年は暮れしか。（キ・シ・シカのしか）

(2) これこそ正義の士といふべけれ。

㊂省結　文勢上、結となるべき語を、わざと省くことあり、之を省結といふ。

遙に見ゆる彼の地點こそ、たしかに南極の地。（なれ）

㊃轉結　一つの文が他の文に連結するために、正當の結を轉ずることあり。之を轉結といふ。

人皆武事を修むることをなん知りて（る）、文事を顧みるもの稀なりき。

注意　なんに對して、知るといふ連體形を用ふべきを、て以下の文に連結するため、知りといふ連用形に轉じたるなり。

呼應

■呼應　一文の中上下の意義を適當に相應ぜしむることを呼應といふ。

副詞の呼應

■副詞の呼應

㊀否定を以て應ずべきもの。

よも（よも息壤の約は違ふまじ。）

決して（假令千艱萬難に逢ふとも、決して挫折すべからず。）

毫も（名聲天下に嘖々たれども、毫も驕慢の色なし。）

其の他未だ　必ずしも　ゆめ　をさ〳〵　等あり。

㊁推量を以て應ずべきもの。

恐らくは（此の說恐らくは眞ならん。）

其の他或は　蓋し　若し　等あり。

㊂反語を以て應ずべきもの。

豈（豈生れながらにして知るものあらんや。）

其の他いかで　何ぞ　焉んぞ　如何ぞ　等あり。

條件の呼應

■條件の呼應　助詞ば及びとも・どもを用ひて**假定**又は**確定の條件**をあらはす時は、其の下の文意は、上の條件に應じて、假定又は確定となるを普通とす。

(1) 明日天氣よくば、運動會あらむ。（假定）

(2) 今日天氣よければ、運動會あり。（確定）

(3) 數は少くとも、價は高からん。（假定）

(4) 數は少けれども、價は高し。（確定）

注意

(1) 明日土曜日ならば（確）、明後日は日曜日（確）なり。

(2) 色取美しければ（假）、之を買はん（假）。

等の類は、必ずしも、違法といふべからず。

品詞の轉成

上卷第三章及び第四章參照

第十七章　品詞の轉成

品詞の轉成　或品詞が其の形のまま、他の品詞に轉用せらるるを品詞の轉成といふ。之に**四種**あり。

一 動詞・形容詞より**名詞**となるもの。動詞は其の**連用形**より、形容詞は其の**語幹**より名詞となり、又共に其の**終止形**より多く**人名**となる。此の種の轉成は其の類甚だ多し。

(1) 清き流の五十鈴川。

(2) 憂を分ち、喜を共にす。

(3) 赤は派手にして、白は上品なり。

(4) 董（タダス）　治（オサム）　秀（ヒイデ）　多（オホシ）　浩（ヒロシ）　均（ヒトシ）

注意 動詞より轉成せる名詞には、語尾を送らざるを常とす。但し他と紛れ易きもの、讀み難きものは之を送る。

二 名詞より**代名詞**となるもの。

君も奮へ、僕も勉めん。

三 名詞・形容詞・動詞より**副詞**となるもの。此の種の轉成も、其の數少からず、就中**形容詞**より轉成するものを多しとす。

(1) 君は今日彼に會へりや。　(2) 深く學ぶ。

(3) たとへ身は死すとも、名は千歳に輝かん。

四 諸種の品詞より**接續詞**となるもの。接續詞は殆ど皆轉成の品詞より成れりと言ふも可なり。但し大抵單純なる轉成にあらずして、多くの品詞の結合せるもの多し。

加之　しか（副詞）のみ（助詞）なら（助動詞）ず（助動詞）

隨つて　隨ひ（動詞）て（助詞）

預け（預り）讀み書き（讀書）思はく　察し　習はし

語の構造

第十八章　語の構造

語は一つ一つの思想を現はせるものなれども、必ずしも一つの言葉に限らず、二つ以上の言葉を組合せて、成ること多し。語を其の構造上より見る時は左の五種となる。

語の五種

純一なるもの

一　純一なるもの。

山　川　人　船　長し

熟語

二　異なる語の結合せるもの。（熟語）

火山　谷川　數人　郵便船　連れ行く　舞戻る　細長し　青白し

連濁（第二番目ノ音ガ濁ル場合）

例ヘバ　谷川。

轉音

酒樽

疊語

三　同じ語の重なれるもの。（疊語）（復數ヲ表ス）

人々　山々　それぞれ

廣々　とくとく

接頭語を有するもの

四　接頭語を有するもの。

み山　おん父　す顔

たばしる　か弱し

接尾語を有するもの

五　接尾語を有するもの。

君ら　御前たち　大人ぶる

面白み　色めく

うれしがる　何日ごろ

接頭語・接尾語については、尚左に詳說すべし。

接頭語

一　接頭語　他の語の頭に接して、其の語と共に一語を形づくるものを接頭語といふ。（二ツ以上ノ單語ニシテ一單語トシテハ用ヒラレズ。）其の主なるものは左の如し。

接頭語定義。形容詞ノ語幹ヲ除クノ外ニ單獨ニ用ヒラレザル者ハ接頭語トシテ取扱フ。動詞ノ語幹デ接頭語トシテ取扱フ者ハ

僻 そよ ニ過ギズ。

さ さ夜　さ霧　さ衣　さ蕨　さ迷ふ

た た易し　たばしる　た繰る

み み山　み空　み雪　み文

お お詞　お許　お知らせ　お出で

（共ニ丁寧ノ意ヲ表ス）

おん 御尋　御父

を を山　を田　を止み　を車　を舟

初 初春　初音　初穂

小 小家　小松　小路

（小ヲ小サシト云ハベ單獨ニ用ヒラレシ共ハ之ハ例外ニテ形容詞ノ語幹ハ除クナリ）

素 素肌　素顔　素手

僻 僻目　僻事　僻讀

諸 諸手　諸人　諸聲

いち いち早し　いちさき（逸先）　いちじるし

三 接尾語

他の語の尾に接して、其の語と共に一語を形づくるものを接尾語といふ。

主なる接尾語は左の四種なり。

一 名詞・代名詞に接して、其の複數をあらはすもの。

我ら　私たち　子ども　君がた　太郎など

二 形容詞の語幹に接して名詞とするもの。

重み　面白さ　勇ましげ

三 他語に接して動詞又は形容詞とするもの。

春めく　時めかす　大人ぶる　男らし

四 他語に接して副詞とするもの。

道すがら　一人ごとに　風のまにまに　一つづつ

上卷第四章參照

文章論
文の成分一
定義

第三篇　文章論

第一章　文の成分（其の一）

定義　語が集まりて、**まとまりたる思想**を言ひ表はしたるものを文といふ。

(1) 花笑ふ。　(2) 開闢以來、君臣の分定まれり。

(3) 畏くも、天皇は現つ御神とあらせらる。

文の成分
主語
述語

文の成分　文は多くの成分を含む。以下順次之を述べん。

主語　述語　文の最も簡單なるものは、主語・述語の二成分を含むのみ。主語は文の題目、卽ち説明せらるるものにして、述語はそれにつきて説明するものなり。

(1) 花　笑ふ。

(2) 富士山は　高く清く美し。

(3) ゲルマニヤ・ブリタニカ・ガリアは空想的人物なり。

今、くはしく主語・述語の關係を表示すれば左の如し。

主語	述語
	ドウシタ（カ）
何ガ（ハ）	ドンナダ（ドンナカ）
	ナンダ（ナニカ）
	ナニセヨ

客語

客語　主語・述語のみにて意味不完全なるとき、之を補ふものを客語といふ。

(1) 猫　捕ふ。

(2) 武士道は　律せざりき。

(3) 老杉・古松　成す。

猫鼠を捕ふ。

武士道は町人以下を律せざりき。

老杉・古松林を成す。

第二章　文の成分（其の二）

修飾語　修飾語は文の成分の一にして、分つて**形容詞的修飾語**・**副詞的修飾語**の二つとす。

一　形容詞的修飾語

文中の**體言**を形容する修飾語にして、大抵、形容詞・形容動詞又は形容詞的語句より成る。

㊀ 形容詞及び形容動詞

(1) 青き水深く湛ふ。　(2) そは堂々たる議論なり。

㊁ 形容詞的語句

(1) 春の野に遊ぶ。　(2) 吹く風寒からず。
(3) 彼は喜多き人なり。　(4) 我が心平かなり。
(5) 波路の末にうきたつ雲。
(6) 武士の精神を支配せるもの。

用言＋助動詞＝連体形。

二　副詞的修飾語

文中の**用言**を限定する修飾語にして、大抵、副詞又は副詞的語句より成る。

㊀ 副詞

(1) 秀句甚だ多し。　(2) 老僕頗る忠實なり。
(3) 其の名最も著はる。

㊁ 副詞的語句

(1) 房總の山突如として現はる。
△(2) 近き舟は行けども、遠き帆は動かず。
(3) 富士山窗の右に立ち、又左にあらはる。
(4) 答案はペンにて認むべし。
(5) 世界第一の高山と、此の絶大の壯觀とに接したる喜に堪へずして、舞踏を始めぬ。

文の成分三

文主

第三章　文の成分（其の三）

文主　主語の上に立ちて、**文章全體の主語**たるものを文主といふ。

(1) 獅子は　**力**（主）　つよし。

(2) 西洋種の草花は　**其の色**（主）　濃艶なり。

(3) 都制は　**規模**（主）　雄大なり。

提部

提部　**客語**が特に其の文章の初めに**抽出**せられたるものを提部といふ。提部のある場合は總て述語は他動詞なり。

(1) 當時の模樣は、詳細に之を語れよ。

(2) 北方より襲來したる賊軍は、我が支隊之を殲しぬ。

提部は大抵、下に　**之を**　といふ對應の語ある筈なれども、時に**之を**を畧せるものなきにあらず。

獨立部

文の成分概括

此の時の愉快は再び味ふを得ざりき。

注意　東京は人口約百八十萬あり。の如き文にありては、東京は は副修とす。（東京には　の意なり。）

獨立部　**感動詞**・**接續詞**及び**呼掛の語**などは、皆獨立部とす。

(1) ああ、壯んなるかな、大利根の流。

(2) 山を跋み、且水を涉る。

(3) 滿堂の諸君、諸君は此の現象を、如何に解釋せんとし給ふぞ。

文の成分概括　文の成分は左の**八種**とす。

一 主語　二 述語　三 客語

四 形容詞的修飾語　五 副詞的修飾語

六 文主　七 提部　八 獨立部

主述關係
述語ノ性質
自他（目的標準）
所相（受身）ノ標準
使役ノ標準

第四章　成分の省略及び位置

文の成分は、其の文意の通ずる限り、時に之を省略することあり。左の文中、朱字は省略せられたる例なり。

(1) 其の後御邊の御ゆくへを承り候はず。（我）（友を）（述）

(2) 終日待てども來らず。（我）（友）

(3) 昨日手紙を送れり。（我）（母に）

(4) 勉強は幸福の母。（なり）

(5) 花木を折るべからず。（汝等）

成分ニ於テ省カル場合ハ主、客、述、文主ナリ。

A. 命令
B. 禁止
ノ場合ハ主語ハ常ニ省ル。

注意 成分の省略は文を美しくす。而して**主語の省略**は我が國の文章の一特徴なり。又命令文には主語を省略するを普通とす。

成分の位置

文の成分は、普通に

主語　客語　述語

の位置を取り、尙、文主は主語の上に、形修は文主・主語・客語の上に、副修は述語の上に（すぐ上には限らず）あるを常とすれども、時には之を變更することあり。但し提部は如何なる場合にも其の位置を變更することなく、又獨立部は常に適宜の所に挿入せらる。成分の位置を變更せる例左の如し。

(1) 巧言令色鮮矣仁。

(2) 美なるかな、山河の固。

(3) 花咲きぬ、桃も櫻も。

(4) 全軍歡呼の聲を揚げつ、アルプの山も震ふばかりに。

副修

注意 成分の位置の變更も、亦、文を美しくす。

第五章　文の構造上の種類（其の一）

文は其の構造上より見て、單文・複文・重文の三種に分つ。

一　單文

主語と述語との文法上の關係が唯一回成立せるものを單文といふ。（其の長さには關せざるなり。）

(1) 雨降る。　(2) 日暖なり。

(2) 學生英語を習ふ。

(3) 山鹿素行は學問に通じ、又、武藝に秀でたり。

（述語二つあれども單文。……共同主語）

(4) 大伴氏と佐伯氏とは、上古、帝室を護衛せり。

（主語二つあれども單文。……共同述語）

句

(1) 山高し。　(2) 木多からず。

(3) 山高けれども、木多からず。

此の例にて、(1)の山高しといふ文が、(3)にては、山高けれども となりて、其の獨立を失ひ、(3)の一部分となりて全く之に附屬せり。斯くの如く、文が其の獨立を失ひ、他の文の一部分となりて、全く之に附屬せるものを句といふ。

二　複文

一つ以上の句を含みて、主語と述語との文法上の關係が、二回以上成立せるものを複文といふ。

(1) 山高けれども、木多からず。

(2) 關羽等、劉備が深く孔明を信賴するを喜ばず。

第六章　文の構造上の種類（其の二）

句は文中にありて、主として左の役目をなす。

句の役目

㊀ 主語（徳高きは、智多きにまされり。）
㊁ 客語（埃及も、一度は、威勢遠近を風靡せるにあらずや。）
㊂ 形修（雲間の月の顯はれ出でたる時、さつと進みぬ。）
㊃ 副修（正義の聲の轟く所、懦夫も何ぞ立たざるべき。）

節

(1) 君行く。
(2) 我行く。
(3) **君行けども**、我行かず。
(4) 君も行き、我も行く。

(1)は單文。(3)は**君行けども**といふ句を含みて複文。然るに(4)に至りては、君も行きが、此の全文の一部分たることは句に等しけれども、全く此の文に附屬せざる相違あり。

斯くの如く、一つの文が其の獨立を失ひ、他の文の**一部分**となりて、同等に**並立**するものを節といふ。

故に**君も行き**は節なり、**我も行く**も亦便宜上**節**といふ。

㊂重文

二個以上の節を含むものを重文といふ。

(1) 天は高く、地は低し。
(2) 青楓江上秋天遠　白帝城邊古木疎。
(3) 織豐時代には、西人來り、葡人來り、蘭人亦尋で來りぬ。
(4) 山青く、水白く、花笑ひ、鳥歌ふ。

單文・複文・重文の最もわかりやすき例。

(1) 雨降る。地固まる。　風吹く。（單文）
(2) 雨降つて、地固まる　（複文）
(3) 雨降り、風吹く。　（重文）

複雑なる文

第七章　複雑なる文

複雑なる文　複文は句を含み、重文は節を含むこと、前述の如し。然れども、更に句の中に節を含み、節の中に句を含むことあるを以て、ここに複雑なる文は生ずるなり。

例へば

(1) 悲多けれども、悲まず。（複文、單純なる句）

(2) 妻子は飢に泣き、債鬼は門に滿つれども、自若たり。（複文、句は節を含む）

(3) 君去つて、長安空し。（複文、單純なる句）

(4) 人去り、人來れども、我が待つ人は影だに見えず。（複文、句は節を含む）

(5) 草色全經細雨濕、花枝欲動春風寒。

花咲き鳥鳴く春の景色こそ面白けれ。

(6) 三つの石を捨てて十の石に就く事は難し。（重文、上節は單純なる節、下節は節の中に句を含む）

(7) 史記は史記を以て一體を始め、太平記は太平記を以て一體を成す。（重文、單純なる節）

(8) 新奇を好むは人の情なれども、學生は此の情に囚はるべからず、放縱を喜ぶは人の弊なれども、學生は此の弊に陷るべからず。（同前）

等の如し。

注意　單文・複文・重文の混合して成れる長き文を、**混文**と稱することあり

句の中に句を含み

二水は無毒蛇なりて一人手坂の石を取りて打殺せば、蛇は今蚤みたるばかりの蜥蜴を吐きて死せり

文の性質上の種類

第八章　文の性質上の種類

文は其の性質上より見て、平敍文・疑問文・感動文・命令文の四種に分つ。

文の種類の變更

㈠ 平敍文　京都は文を以て立ち、關東は武を以て榮ゆ。

㈡ 疑問文　(1) 富みて驕らざるは少からずや。
(2) いかでか奮發せざるべき。

㈢ 感動文　ああ、武士道の精華の燦たるかな。

㈣ 命令文　一族郎黨を扶持して金剛山にたてこもるべし。

注意 反語は疑問文の中に入る。

文の種類の變更　文は構造上にても、性質上にても、共に一より他に變更せらるることあり。是亦文を美しくする方法の一つなり。左に二三の例を示さん。

(1) (イ) 山高し。
(ロ) 月小なり。

(2) 山高く、月小なり。

(3) 咲ける花は美し。

(4) 花の咲けるは美し。

(5) 父母の恩は至大なり。

(6) 父母の恩は豈至大ならずや。

(7) 父母の恩の至大なるかな。

(8) 進め、矢玉の雨の中。

(9) 余は汝に、矢玉の雨の中に進めと命ず。

(10) 邪心多き人は、之を遠ざくべし。

(11) 多く邪心を包有せる人は之を遠ざくべし。

注意 文を作るには、適宜に其の各種類を混用すべし。

文の解剖一

第九章　文の解剖（其の一）

文の解剖　文の解剖には、左の二種類あり。

文を品詞に分つを品詞論の解剖といひ、

文を成分に分つを文章論の解剖といふ。

品詞論の解剖

一　品詞論の解剖　品詞論の解剖は、初めに能く全文を通讀して、其の**品詞の職能**を知りたる上にて、上部より順次に分解し行くべし。

其の一例を示せば左の如し。

我が文學の黄金時代は必ず徳川氏の季年に來りしならん

（代名詞　助詞　名詞　助詞　名詞　助動詞（過去）　助動詞（推量）　助動詞（指定））

注意　動詞は其の**活用**を、助動詞は其の**種類**を記すべし。

文章論の解剖

二　文章論の解剖　文章論の解剖は、初めに能く全文を通讀して、其の**文意**を確め、先づ**成分**に分ち、次ぎに**構造上・性質上の種類**を斷定すべし。

而して成分は、左の順序によりて分解すべし。其の初めに**主語**を檢し、次ぎに**述語**を檢することは、分解上最も肝要なることなり。又初めには成るべく粗く大きく分ち、次第に細目に入ることも忘るべからざることとす。

一　主語
二　述語
三　客語
四　文主　提部　獨立部　若しくは　形修　副修

左に文章論より解剖したる一例を示さん。

文の解剖二

我が文學の黃金時代は必ず德川氏の季年に來りしならん。

初めに右の如く大きく分ち、次ぎに細目に分つべし。

我が文學の黃金時代は　（主語）

德川氏の季年に　（副修）

成分の分解終れば、

構造上より　**單文**　性質上より　**平敍文**

と斷定すべし。故に文の解剖には、左の四種の事業あり。

一　品詞の解剖　二　成分の解剖

三　構造上の種類の斷定

四　性質上の種類の斷定

第十章　文の解剖（其の二）

成分解剖の順序

成分解剖の順序　成分の解剖は、必ず**粗より精に入り、大より小に至る**べきこと勿論なるが、更に其の例を示すべし。

紅葉照り添ふ岡の上の眺面白し。

注意　成分解剖の際、成分の**省略せられたるものに逢へば、先づ其の主要なるものを補ひたる後にすべし。**

（我）問へども、（彼）答へず。

斯くの如く補へば、初めて複文たること明瞭となる。

されど彼に・之を・之に等は補ふに及ばず。

總括

總括　今迄學習せる文法の事項を總括すれば左の如し。

總括

- 一 文法の二分科
  - 一 品詞論
  - 二 文章論
- 二 品詞論にて研究すべき事項
  - 一 品詞の種類
  - 二 品詞の性質
  - 三 用言の活用
  - 四 品詞の連續
  - 等
- 三 文章論にて研究すべき事項
  - 一 文の成分
    - (1) 種類
    - (2) 位置
    - (3) 省略
  - 二 文の種類
    - (1) 構造上
    - (2) 性質上
  - 三 係結及び呼應……
  - 四 文の解剖
  - 等
  - ……（本書にては便宜上品詞論に附説す）

日本文法教科書下卷終

日本文法教科書　附錄

一　送假名法

（國語調査委員會編纂「送假名法」ニ據ル）

第一則　漢字ヲ以テ活用語（動詞・形容詞・助動詞）ヲ書キアラハストキハ、語尾ノ活用スル部分ヲ送假名トナスベシ。

(1) 普通ノ活用形。

◎終止形ノ語尾ヲ考ヘ見ヨ

（例）

書カズ	書キタリ	書クベシ	書ケドモ	動詞
起キズ	起キタリ	起クベシ	起クレドモ	起クルナリ
告ゲズ	告ゲタリ	告グベシ	告グレドモ	告グルナリ
死ナズ	死ニタリ	死ヌベシ	死ネカシ	死ヌルナリ
決セズ	決シタリ	決スベシ	決スレドモ	決スルナリ
善ク學ベ	善シトナリ	善キ人	善ケレドモ	形容詞
苦シク思フ	苦シトイフ	苦シキ時	苦シケレドモ	形容詞

學ブ可ク　學ブ可シ　學ブ可キコト　學ブ可ケレドモ
花ノ如ク　花ノ如シ　花ノ如キ御代　助動詞

(2)活用形ノ音便ニヨリテ、他ノ音ニ轉ジタルモノ。

例
焼キテ—焼イテ
思ヒテ—思ウテ
積ミテ—積ンデ
遊ビテ—遊ンデ
立チテ—立ツテ
長クナル—長ウナル
悲シキカナ—悲シイカナ
動詞
形容詞

(3)從來延言ト稱シテ、活用形ノ延ビタルモノト見做シタルモノ。

例
願フ—願ハク
恐ル—恐ラク
見ム—見マク
言ヘル—言ヘラク

除外一　也ノ終止形、候ノ連體形、終止形ニハ送ラズ。

例　朝ニ道ヲ聞イテ、夕ニ死ストモ可也。
（コレハ諸國一見ノ僧ニテ候。）

除外二　或・非・否ニハ活用ノル・ラヲ送ラズ。

例　或人ハコノ說信スベキニ非ズ。當時ノ傳說カ、否ズンバ後人ノ附會ナルベシトイヘリ。

除外三　曰ハハヲ送ラズ。

例　孔子曰ク仁者ハ山ヲ樂シムト。

第二則　活用語ノ活用セザル部分ニ、他ノ語ノ活用形ヲ含ムモノハ、送假名トシテ之ヲ書キアラハスベシ。

(1)動詞ノ中ニ他ノ動詞ノ活用形ヲ含ムモノ。

例
驚カス　動カス　纏ハス　食ハス
行ハル　塞ガル　語ラフ　移ラフ　老イバム

(2)動詞ノ中ニ形容詞ノ活用形ヲ含ムモノ。

怪シム　悲シム　樂シム

(例) 全クス　辱クス　全ウス　辱ウス
悲シガル　嬉シガル

(3) 形容詞ノ中ニ動詞ノ活用形ヲ含ムモノ。

(例) 騒ガシ　歎カシ　喜バシ　願ハシ　疑ハシ
歎カハシ　忌マハシ

第三則　ケシノ語尾ヲ有スル形容詞ニ用ヒラレタル漢字ニハ、猛シノ一語ヲ除ク外、スベテケシヲ送假名トナスベシ。

(例) 遙ケシ　豐ケシ　長閑ケシ

第四則　形容動詞ニ用ヒラレタル漢字ニハ、語尾ノナリ・タリ・カリヲ送假名トシテ書キアラハスベシ。

(例) 詳ナリ　異ナリ　立派ナリ
斐タリ　巍然タリ　滔々タリ
善カリ　惡シカリ　苦シカリ

第五則　副詞ヨリ轉ジテ活用語ニ用ヒラレタルモノハ、活用以外、尚、副詞ノ送假名ヲ附スベシ。

(例) 再ビス　以テス　(動詞)
未ダシ　甚ダシ　(形容詞)
專ラナリ　頻リナリ　(形容動詞)

第六則　漢字ノ二字以上ヲ以テ複合活用語ニ訓ジタル場合ニハ、ソレゾレ送假名ヲ附スベシ。

(例) 流シ出ス　流レ出ヅ
折リ込ム　折レ込ム

除外　二音ノ動詞ノ上部ニ來リタルトキハ、時宜ニヨリ、ソノ送假名ヲ省クコトヲ得。

(例) 打語ラフ　差出ス　引受ク

成リ、成シ・拔キ・拔ケノ如ク二音ノ語ニシテ自他ノ辨別ヲ必要トスルガ如キ場合ハ、之ヲ送ラザルベカラズ。

第七則　活用語ヨリ轉ジテ副詞・接續詞ニ用ヒラルヽモノニハ、ソノ活用ヲ書キアラハシテ送假名トナスベシ。但シ副詞・接續詞ニノミ用フル漢字ノ場合ハ、尚第八則ノ例ニ據ル。

(例) 因ツテ 極メテ 總ジテ 及ビ 案ズルニ
敢ヘテ 委シク 餘リニ 代ル代ル

豫テ・渾テ・於テ・雖モ・況ヤノ如ク、國語ノ語原訓法ヨリイヘバ、活用語タルコト明瞭ナルモノト雖モ、普通ノ慣用上、其ノ漢字ノ活用語ヲ寫スニ用ヒラレザルモノハ、尙普通ノ副詞ニ準ズベシ。

第八則　二音ノ副詞モシ・ヨシ・ヨク・カクノ四語、及ビ三音以上ノ副詞・接續詞ニ用ヒラレタル漢字ニハ、最後ノ一音ヲ送假名トシテ添フベシ。

(例) 若シ 縱ヨシ 能ク 克ク 斯ク (二音ノ例)
併シ 殆ド 必ズ 尤モ 但シ
聊カ 爭イカデ 自ラ 甚ダ 雖モ (三音以上ノ例)

除外一　各・愈・偶・交・屢・抑ノ如ク、一字ノ漢字ヲ以テ、二音以上ノ語ノ重音ヲ表スモノハ、誤讀ヲ生ズル虞アル時ニ限リ、語ノ右側下ニくヲ附シ、送假名ヲ附セズ。

除外二　日外・加之・遯莫・流石・就中・假令・生憎ノ如ク、漢字ノ熟語ヲ訓讀シタルモノニハ、送假名ヲ附セズ。

第九則　副詞・接續詞ノ語尾ニ助詞・接尾語アルモノハ、送ルベキ部分ヲ副ヘテ送ルベシ。

(例) 爭デカ 必ズシモ 聊カモ 併シナガラ

第十則　名詞・代名詞等ニハ送假名ヲ附セザルヲ通則トスレドモ、動詞ヨリ轉ジテ名詞トナレルモノノ中、左ノモノニハ、本ノ動詞ノ活用ヲ書キアラハシテ送假名トスベシ。

(1) 漢字音ヲ活用シタル動詞ノ名詞トナレルモノ。

(例) 封ジ 通ジ 察シ 達シ 書損ジ

(2) 第一則第三項ノ動詞ヨリ名詞トナレルモノ。

(例) 思ハク

(3) 第二則第一項ノ動詞ヨリ名詞トナレルモノ。

(例) 語ラヒ 習ハシ

(4) 第十五則ノ動詞ヨリ名詞トナレルモノ。

(例) 赤ラミ 定マリ

(5) 動詞ニ助動詞ノ添ハリテ名詞トナレルモノ。

(例) 謂ハレ　使ハシメ

(6) 名詞ヨリ直ニ動詞ニ活用シ、更ニ其ノ連用形ノ名詞トナレルモノ。

(例) 宿(ヤド)リ　宿(ヤド)　皺(シワ)ミ　皺(シワ)

(7) 分詞ノ性質ヲ有シテ、名詞ト動詞トノ中間ニ在ルモノ。

(例) 聞キニ來ル　買ヒニ行ク

分詞トハ一語ニシテ二樣ノ性質ヲ兼ヌルヲイフ。例ヘバ「演說ヲ聞キニ來ル」ノ聞キノ如キ語ニシテ、演說トイフ詞ニ對シテハ動詞ナレドモ、來ルトイフ詞ニ對シテハ名詞ノ格トナルモノナリ。

代名詞ノ下ニ來ルベキ助詞ハ、必ズ書キアラハスモノトス。「我ガ國」「其ノ山」ノ如シ。

第十一則　動詞・形容詞ノ下ニサ・ミ・ゲ、ソノ他ノ接尾語ヲ附加シテ成レル名詞ハ、動詞・形容詞ノ送ルベキ部分ヲ添ヘテ送ルベシ。

(例) 甘(ア)ミ　重(オモ)ミ　可笑(ヲカ)シミ　憎(ニク)シミ　樂(ラク)シサ　露(ツユ)ケサ　歸(カヘ)ルサ　傷(イタ)マシサ

(物思ヒ)ゲ　心有リ(ゲ)　物思ハシ(ゲ)

(注意) 悲・樂・親・苦・惜ハ動詞ヨリ出デタル名詞ト見做シ、送假名ヲ附セズ。

第十二則　動詞ヨリ轉ジテ名詞トナルモノノ中、左ノ如キ場合ニハ、時宜ニヨリ送假名ヲ附スルコトヲ得。

(1) 自他兩樣ノ動詞ニ用ヒラルル漢字ニシテ、單獨ニ名詞トシテ用ヒラレ、又ハ複合名詞ノ一部分トシテ用ヒラレ、自他辨別ノ必要ヲ感ズルトキ。

(例) 殘(ノコ)リ　渡(ワタ)シ　預(アズ)ケ入リ主

(2) 漢字ヲ音讀セル同形ノ語アリテ、辨別ノ必要ヲ感ズルトキ。

(例) 變(ヘン)リナシ(變(ヘン)ナシ)　讀(トク)ミ書(ショ)キ(讀書)

第十三則　數詞ハ一ツ・二ツ・三ツ等數フルトキノツ、半バノバ、萬ヅノヅ、ヲ送ルベシ。

(例) 二ツ　五ツ

第十四則　連續セル語句ノ一品詞トシテ用ヒラルヽモノハ、各品詞ノ送ルベキ部分ヲ送ルベシ。

（例）食ハズ嫌　然リト雖モ　何ヲ以テカ
然ル程ニ　怪シカラヌ

第十五則　オヨソ單語ニ當テタル漢字、僅ニ其ノ一部分ニ該當セリト見ユル場合ニハ、其ノ他ハ送假名トシテ書キアラハスベシ。

（イ）指サス　棹サス　畫ガク　鞭ウツ
（ロ）春メク　黄バム
（ハ）赤ラム　薄ラグ　安ラケシ　安ラカニ
（ニ）定マル　連ナル　静ケシ　横タハル　元ヨリ

（イ）（ロ）ニ當テタル漢字ハ純粹ノ名詞ニシテ、自ラ定訓アリ。（ハ）ハ赤旗・薄着等ノ如ク熟語トナリ、又ハ獨立シテ名詞ノ如ク用ヒラレ、（ニ）ハ普通ノ人名・地名等ニ用ヒラレテ、赤・薄・定・連等ハ自ラ一定ノ訓義タルガ如キ觀アリ。故ニ本則ニ擧ゲタル諸例ノ如キモノニアリテハ、其ノ定訓若シクハ定訓ト見ラルベキ漢字以外ノ音ヲ送ルコトニシタルナリ。

梳掌ノ如キハ「クシケヅル」・「ツカサドル」ト訓ズルノミニテ、名詞トシテ用ヒラルルコトナシ。故ニ第一則ニヨリ單ニ其ノ活用ノミヲ送假名トシテ、梳ル・

掌ルト書クモノトス。

凡ソ動詞ノ連用形ガ名詞トシテモ用ヒラルルモノハ、單ニ其ノ活用ノミヲ以テ足レリトスレドモ、本則ノ諸例ノ如キハ其ノ連用形ガ名詞トシテハ通用シ難シ。カカル語ハ本則ノ如ク二音以上ヲ送ルモノト知ルベシ。

二　句讀法

（文部大臣官房圖書課立案「句讀法」ニ據ル）

總則

一　本法ハ文ト文トノ關係、文中ノ語・句・節ノ相互ノ關係ヲ明カニスルヲ以テ目的トス。

（注意）本法中ノ句トハ本書ノ所謂連語ニシテ、節トハ本書ノ所謂句及ビ節ナリト知ルベシ。

二　前項ノ目的ノタメニ左ノ五種ノ符ヲ使用ス。

○ マル　、テン　・ポツ　「」カギ　『』フタヘカギ

三　「マル」ノ符號ヲ除ク外、讀誦ノ都合ニヨリテハ、誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ、本法ノ規定ニ拘ラズ符號ヲ省キ、又ハ之ヲ加ヘ施スコトヲ得。

（注意）以下引例ノ文中注意スベキ句讀點ニハ、右傍ニ‖ヲ附ス。

第一章　マル

「マル」ハ文ノ終止スル場合ニ施ス。

例ノ一　（述語ヲ正序ニ置キタル場合）

人が雨戸を明けて居る。‖

例ノ二　（述語ヲ顚倒シテ置キタル場合）

旗を持ちませう私は。‖

例ノ三　（述語ヲ省略シタル場合）

生きて歸る者僅に三人。‖

第二章　テン

「テン」ハ左ノ諸種ノ場合ニ施ス。

一　形式ヨリ見レバ終止シタレドモ、意義ヨリ考フレバ次ノ文ニ連續セルモノノ下。

例（一）　和助が樹の下を出て、まだあまり遠くも行かぬ時のことでありました、目が暗む樣ないなびかりがすると一所に、耳が裂ける樣な恐しい音がしました。

（二）　皆さんは蝙蝠を鳥だと思ひましたでせうか。蝙蝠は鳥ではありませぬ、頭もからだも鼠に似て居るけものです。

二 二ツ以上疊ミタル同趣ノ文ノ下。但シ最後ノ文ノ下ハ此ノ限ニアラズ。

例(一) 山を越えて行かうか、河に沿うて行かうか。

(二) 彼は男子の氣慨のない者である、丈夫の本領を失つた者である、我が大和民族の面目を毀損した者である。

(三) 己の長をいふこと勿れ、人の短をいふこと勿れ。

三 獨立ノ感歎詞、呼掛ノ語ノ下。但シ顚倒シテ置キタルトキハ其ノ前後。

例(一) ああ、兵吉はこれより如何にして日を過すならんか。

(二) おとうさん、あなたはどこへいらつしやいますか。

(三) それでも、にいさん、雨が降つたら、しやうがないではありませんか。

四 動詞・形容詞・助動詞ノ中止法ヲ用ヒテ續ケタル同趣ノ語・句・節ノ下。

例(一) 甚だ暑く、うつたうしき日。

(二) 我を生み、我を養ひ、我を敎へたる父母。

(三) 項羽は黃河の北で戰ひ、劉邦は黃河の南で戰つた。

(注意) 中止法トハ文の結ビトナルベキ處ヲ中止シテ句トスル法ニテ、動詞・形容詞・助動詞ノ連用段ノ語形即ち是なり。

五 並列セル同趣ノ名詞・名詞句・名詞節ノ間。

例(一) 座中に琴引ける、笛吹ける、鼓打てるがあり。

(二) 規則の整へる、約束の行はるる、實に歡賞に堪へたり。

六 並列セル同趣ノ形容的修飾語・形容的修飾句・形容的修飾節ノ間。

例(一) 松の木は青い、針の樣な葉をもつて居る。

(二) 情の厚い、且家の富んだ老人は死なれた。

(三) みなりはわるい、併し身分はよささうな子。

七 並列セル同趣ノ副詞的修飾語・副詞的修飾句ノ間。

例(一) 此の文は平易に、正確に、且面白く作られたり。

(二) 大いに面白く、又大いに有益な話。

八 複文ノ副詞節ノ下。

例(一) 友だちは頻りに上京を勸めるけれども、兄は賛成しない。

(二) 酒と煙草とは衞生に害あれば、之を禁ずるを可とす。

九 從屬節ヲ含メル副詞ノ下。

例(一) 知らせを聞いて、巡査が馳せて來た時には、賊は既に影を隱して居た。

(二) 雪いと面白く降りたる朝、帝は端近く出でさせたまひて、雪を御覽じけり。

十 複文ノ主節ノ主語ノ下ニ從屬節ノ來レルトキ、主語ノ下。

例(一) 父は、太郎の此の頃の樣子がすつかり變つて來たので、ひどく心配した。

(二) 宇佐神社の境内は、老杉枝を交へて、晝猶夜の如し。

十一 或成分ニ相當スル語ヲ特ニ提示セルトキハ其ノ下。但シ客語ニ相當セルモノヲ提示セル場合ハ此ノ限ニアラズ。

例(一) あの梅の植ゑてある青磁の鉢、あれが私の父に貰つたものです。

(二) 高山彦九郎・蒲生君平・林子平、この三人を寛政の三奇士といふ。

十二 名詞節ノ下ニ天爾乎波ノ無キトキ、其ノ下。

例(一) 交通通信機關の完備せる、人をして國の廣袤の短縮せるにあらざるかを疑はしむ。

(二) クルップの職工を率ゐることの巧なる、經驗に富み、且權力を有する老練家も尙遠く及ばざる程なりき。

(注意) 本法ノ天爾乎波トニヲハハ本書ノ助詞ナリ

十三 主部長キトキ、其ノ下。

例(一) 特派員として十二月二十五日戰地に出張せしめたる社員某は、昨日本社に詳細なる通信を送り來れり。

(二) 雨水等の深く土地の中に浸みこみて、粘土又は堅き岩の上にたまれるが、井戸の水なり。

十四 他ノ語ヲ修飾スベキ副詞・副詞句ガ下ニ來ル語ヲ修飾スルガ如ク見ユル虞アルトキ、其ノ下。

例(一) 甲君は甚だ、高尙なる書を好めり。

(二) 先生が少しばかり、面白い話をなさいました。

(三) 蚜蟲は蜜蜂の樣に、甘い蜜を拵へる。

十五 他ノ語ノ修飾スベキ形容的修飾語ガ下ニ來ル修飾語ヲ修飾スルガ如ク見ユル虞アルトキ、其ノ下。

例 私はこの、芋蟲に似た蠶は嫌です。

十六 主語(主部)ガ客語ノ形容的修飾語ノ主ナルガ如ク見ユル虞アルトキ、其ノ下。

例　太郎は、目も見えず、耳も聞えぬ父をいたはる。

十七　箇々ノ名詞ガ熟語名詞ト紛レ易キ虞アルトキ、其ノ間。

例(一)　母、子を抱く。

(二)　山、上に聳えて高し。

(三)　この人、馬を殺す。

十八　主語ガ客語ト粘着スル虞アルトキ、其ノ下。

例　頼朝、範頼、義經をして平氏を攻めしむ。

十九　假名ニテ書ケルトキ、語ト語ト粘着スル虞アルトキ、其ノ下。

例　兵を起して、我が國に、てむかひたり。

二十　形容的修飾語・形容的修飾句・形容的修飾節ガ並列セル同趣ノアラユル語句ヲ修飾スルトキハ其ノ下。

例(一)　興福寺の、南圓堂・北圓堂・五重の塔。

(二)　汽車の窓より見ゆる、田・畑・山・川皆我が國のものとは異なり。

(三)　蝶の飛ぶ、菜畑・麥畑の間を過ぐ。

二十一　或語ガ上ナル語ト同格ナルトキ、其ノ前後。

例　われおちよの友だち、太郎の妹、を連れて遊ぶ。

第三章　ポ　ツ

「ポツ」ハ並列セル同趣ノ名詞ノ間ニ施ス。但シ**や・も・と**ナドノ天爾乎波ニテ並列セル場合、接續詞ニテ二ツノ名詞ヲ並列セル場合、及ビ分別書方ヲ用ヒタルトキハ此ノ限ニアラズ。

例　横須賀、吳、佐世保、及び舞鶴は日本の軍港なり。

第四章　カ　ギ

「カギ」ハ左ノ場合ノ右ノ肩ト左ノ脚トニ施ス。

(一)　對話ノ文

例　次郎は父の袂を引きて、「おとうさん、今の人はきちがひでせうか。」といひたり。

(二)　獨語ノ文

例　虹は「日は唯照るだけだから、誰も譽める人がないのだ。自分は此の通り美しいから、人が皆譽めるのだ。」といひました。

(三)　獨思ノ文

例　太郎は嬉しくてたまらず、あゝ、やつぱり起きて書かう、起きて書いても、居眠さへせず、勉強する樣に心掛ければよいのだから。」と決心した。

(四)引用ノ文

例　孔子も「利によりて行へば、怨多し。」といへり。

第五章　フタヘカギ

「フタヘカギ」ハ對話ノ文、獨語ノ文、獨思ノ文、引用ノ文ノ中ニ更ニ他ノ對話ノ文、獨語ノ文、獨思ノ文、引用ノ文ヲ引用セルトキ、其ノ右ノ肩ト左ノ脚トニ施ス。

(例)　父は文吉に「もしおとうさんがおまへのいふ通りになつて、遊に行つて選擧をしなかつたら、人は『文吉のおとうさんは村のためを思はない人だ。村中の人の迷惑するのをかまはない人だ。』とわるくいひませう。おとうさんはそんなことをいはれることはだいきらひです。」といひました。

三　許容文法

(明治三十八年十二月二日文部省告示第五十八號ニ據ル)

教科書ノ檢定又ハ編纂ニ關シ文法上許容スベキ事項ヲ定ムルコト左ノ如シ

文法上許容スベキ事項

一　「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用ヰルモ妨ナシ

二　「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

三　過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用ヰルモ妨ナシ

例　火災ハ二時間ノ長キニ亙リテ鎮火セザリシ

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ

四　「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用ヰルモ妨ナシ

(五)　「ヽヽセサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　手習サス　周旋サス　賣買サス

六　「ヽヽセラル」トイフベキ場合ニ「ヽヽサル」ト用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　罪サル　評サル　解釋サル

七　「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用ヰルモ妨ナシ

例　最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム

上下貴賤ノ別ナク各其地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ

八　佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ

例　唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ

攻擊開始ヨリ陷落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ

九　てにをはノ「ノ」ハ動詞・助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ

例　花ヲ見ルノ記

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ

十　疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞・形容詞・助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ

例　有ルヤ　面白キヤ　父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ

十一　てにをはノ「トモ」ノ、動詞、使役ノ助動詞及ビ受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　數百年ヲ經ルトモ　如何ニ批評セラルルトモ

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ

十二　てにをはノ「ト」ノ、動詞、使役ノ助動詞及ビ時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　月出ヅルト見エテ　嘲弄セラルヽト思ヒテ

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ　萬人皆其德ヲ稱ヘケルトヅ

十三　語句ヲ列擧スル場合ニ用ヰルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限リ最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ

例　月ト花　宗教ト道德ノ關係　京都ト神戸ト長崎ヘ行ク

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例

史記ト漢書ト。ノ列傳ヲ讀ムベシ

史記ト漢書ノ列傳ト。ヲ讀ムベシ

十四　上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「**や**」ヲ置クモ妨ナシ

例　誰ニヤ問ハン　幾何ナルヤ　如何ナル故ニヤ　如何ニスベキヤ

十五　てにをはノ「**モ**」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「**トモ**」或ハ「**ドモ**」ノ如ク用ヰルモ妨ナシ

例　何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ
期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ
經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ

誤解ヲ生ズベキ例

請願書ハ會議ニ付スルモ(スルトモ スレドモ)之ヲ朗讀セズ
給金ハ低キモ(クトモ ケレドモ)應募者ハ多カルベシ

十六　「**トイフ**」(トイフ語ノ代リニ「**ナル**」ヲ用ヰル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ)

例　イハユル哺乳獸ナルモノ　顏回ナルモノアリ

理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承認セラルルモノハ德川時代國學者ノ研究ニ基キ專ラ中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ然レドモ之ニノミ依リテ今日ノ普通文ヲ律センニハ言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズコレマデ破格又ハ誤謬トシテ斥ケラレタルモノト雖モ中古語中ニ其ノ用例ヲ認メ得ベキモノ尠シトセズ故ニ文部省ニ於テハ從來破格又ハ誤謬ト稱セラレタルモノノ中慣用最モ弘キモノ數件ヲ擧ゲ之ヲ許容シテ在來ノ文法ト並行セシメンコトヲ期シ其ノ許容如何ヲ國語調査委員會及高等教育會議ニ諮問セシニ何レモ審議ノ末許容ヲ可トスルニ決セリ。

日本文法教科書　附錄終

大正三年七月廿八日印刷
大正三年八月一日發行

日本文法教科書

定價	
上卷	金拾七錢
練習篇	金貳拾壹錢
下卷	金拾九錢
練習篇	金拾九錢

著者　田中好賢　高本千鷹

發行者　東京市日本橋區鐵砲町三番地　合資會社　六盟館

右代表者　杉本七百丸

印刷者　東京市京橋區弓町二十四番地　高橋郁

發行所　東京市日本橋區鐵砲町三番地　合資會社　六盟館
電話浪花二七六四番　振替口座東京一二五五〇番

特約大販賣所　大阪市南區心齋橋筋一丁目　柘村文海堂
電話南九番　振替口座大阪四三二番

印刷所　東京市京橋區弓町三　協印刷株式會社

広島大学図書
2000044037